

文部省 検定 済教科書
財団法人 学校図書研究会 編修

1 1
学 図 小社502

社会科 五年

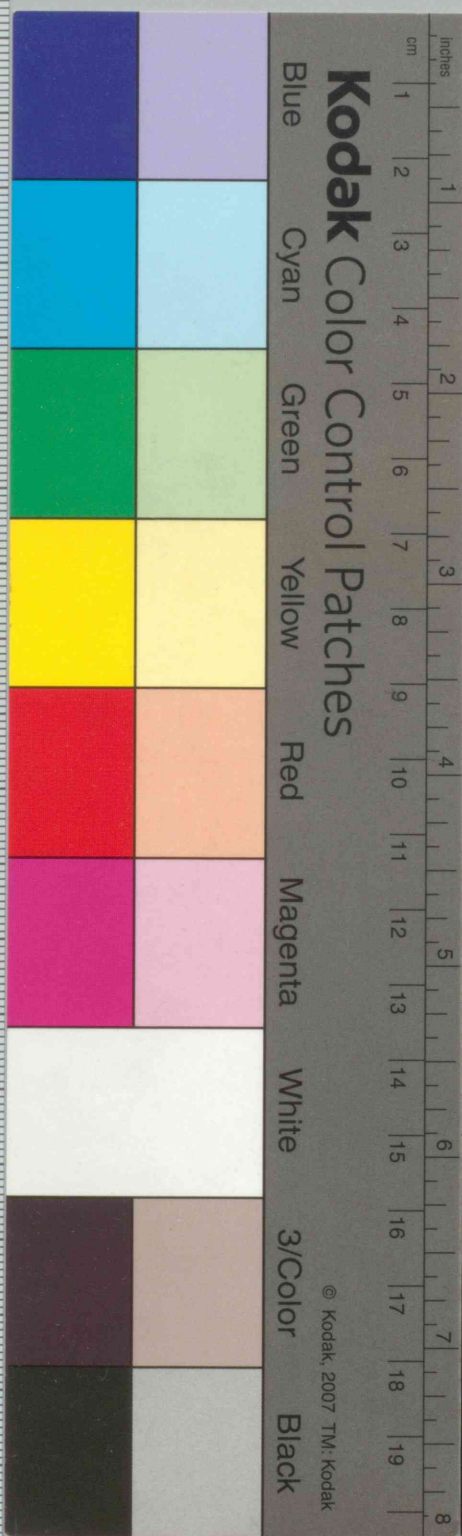
教育部
資料室

村の生活 町の生活



学校図書株式会社

11KD
G16



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

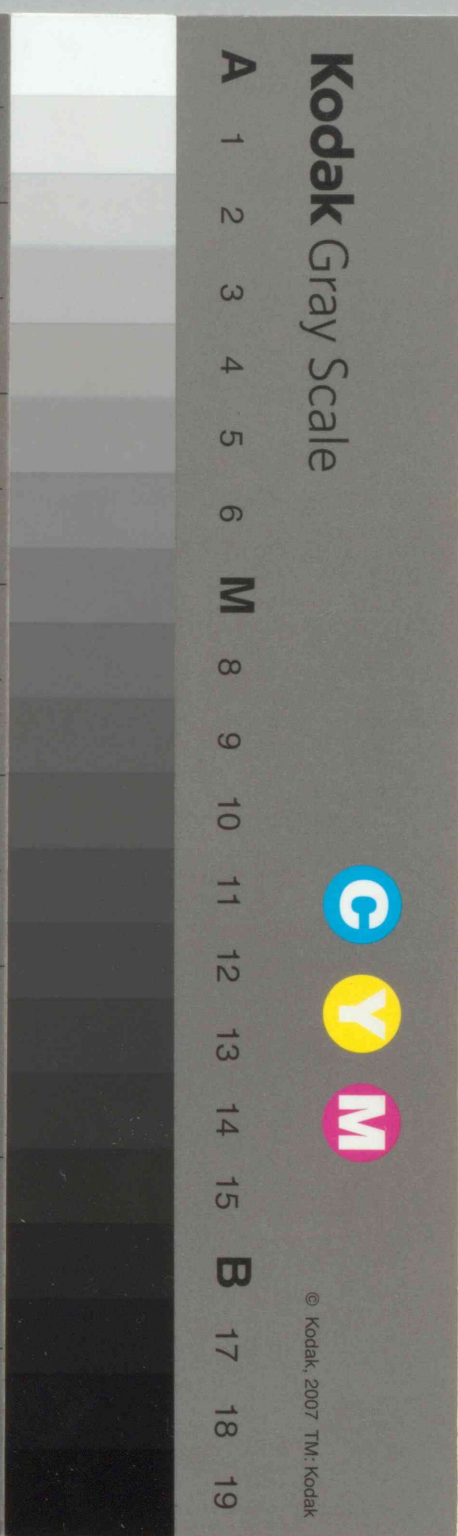
Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

60035

教科書文庫

5
300
34-1950
01304 49979



寄贈

教科書文庫

6

301

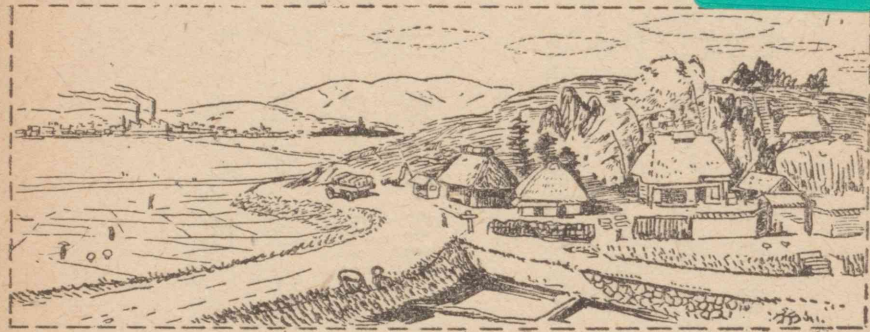
34-1950

0130449979

昭和二十五年 月

日 文 部 省 検 定 済 小 学 校 社 会 科 用

中央図書館



村の生活 町の生活

広島大学図書

0130449979



学校図書株式会社

広島大学
教育学部図書

広島大学図書

0130449979



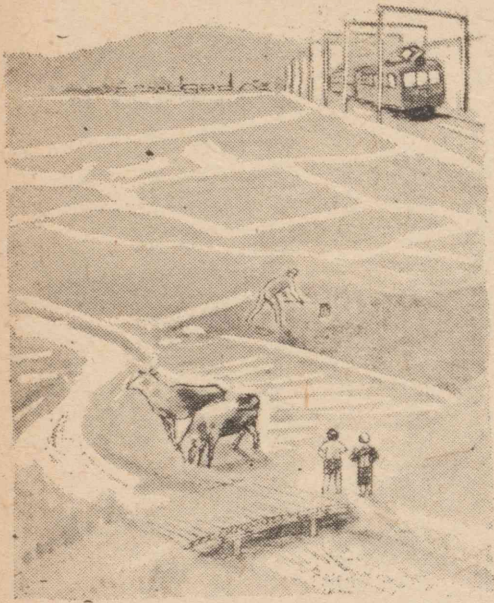
もくじ

一	花子の村	五
(一)	花子の村	五
(二)	田うえのころ	十
(三)	米の分布調べ	十九
二	とりいれを終えて	三十
(一)	秋のみかん山	三十
(二)	秋から冬へ	四十一
(三)	開拓村の話	五十
三	漁港をたずねて	六十一

(一)	魚の水あげ	六十一
(二)	めぐまれた漁場	六十七
(三)	塩田の見学	八十
四	村から町へ	九十一
(一)	町への道路	九十一
(二)	町から村へ	九十六
五	都会の人たち	百五
(一)	みち子からの手紙	百五
(二)	にぎやかな都会	百十一
(三)	町についての研究	百十八

一花子の村

(一) 花子の村



青や黄に色どられた田園の間を、こうがい郊外電
車が走っています。

やがて、電車は、工場の横の駅にとまり
ました。かなりたくさん人がおりたよう
です。

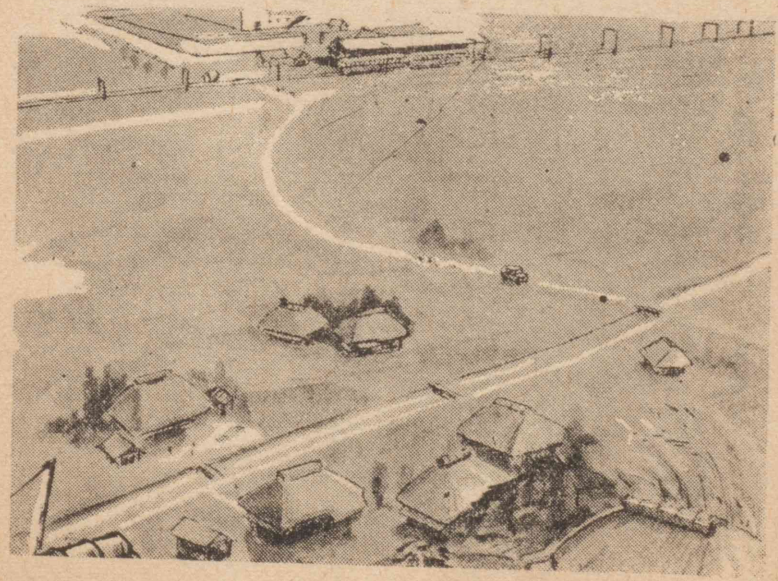
ここから、道は左右にわかれています。
左に道をとると、広い田園が開けていて、
農村らしいおもむきをあらわしています。

さちんとしきられたたんぼには、げんげの花が美しくさいいていて、川べりには、草をはむうしのすがたも見られます。

小川づたいに道を右にとつて、橋をわたると、田園のようすは、また、いちだんとちがっています。道をはさんだ両がわには、十数けんの家があつて、あちらこちらのおかの上や、竹やぶのそばにも、数けんずつかたまつた部落が見えます。

このあたりいつたいが、花子さんの村なのです。

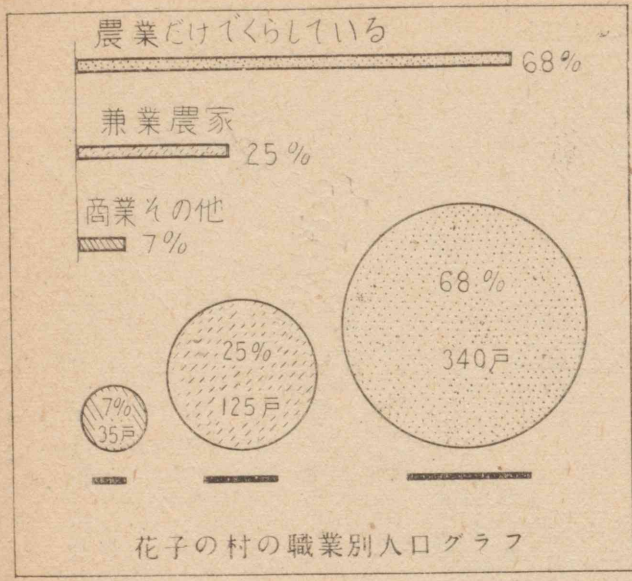
花子さんの村は、北がわに山をひかえ、南には田園が開けています。東西およそ十キロ、南北は六キロあまりもあつて、わり



花子の村

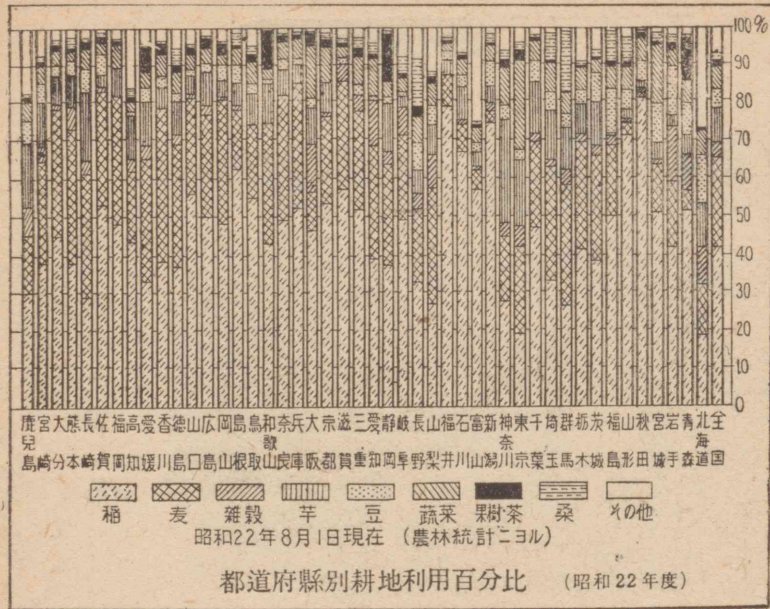
に大きな村です。

この村は、むかしからの農村で、村の人々は農業によつてくらしをたててきました。花子さんの家も、農家です。



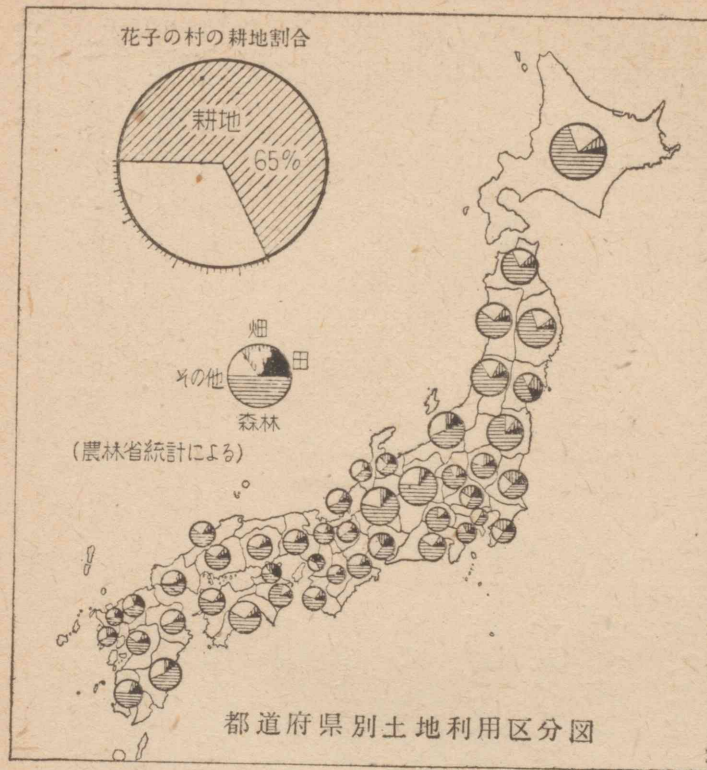
花子の村の職業別人口グラフ

でも、近ごろは、村の人々のくらしのようすも、だんだんかわつてきました。このことは、上の職業別人口をあらわしたグラフによつてもよくわかります。これによると、農業だけでくらしをたてているものが、全体の六十八パーセントもあつて、いちばん多いようすです。しかし、昭和十四年ごろにくらべると、すでに十一パーセントも少なくなつています。ところが、兼業農家は、そのわりあいぐつとふえています。これは、この村が都市



は、都市からの野菜の需要が多いからです。一步農家の庭さきにたつと、にわとりやうさぎのよくかわれているのを見かけます。農家の副業になっているのです。また、北の山のふもとには、牧場もあります。ここではたくさんにゅうぎゅうの乳牛を飼っています。かわいらしいめんやう綿羊も数頭いるようです。ここでしぼられた牛乳は、この村だけにくばられるのではなくて、町にも送られています。

このように、農村がさまざまないとなみをするようになったのは、近年、世の中が進んで、都市と村との関係が深くな



の近くにあるので、そのえいきょうをうけて、村のようすがだんだんかわってきたからです。つまり、町とのいききも便利になって、町の会社や郊外の工場につとめる人が多くなつたからです。花子さんの家でも、にいさんは村の協同組合につとめ、ねえさんは町の銀行につとめています。

村の耕地面積を見ると、村全体の六十五パーセントにもあつていて、耕作されているもののおもなものは米です。これにつぐのは麦で、それに野菜の栽培の多いことが、この村の特色です。都市をひかえたこの村で

の近くにあるので、そのえいきょうをうけて、村のようすがだんだんかわってきたからです。つまり、町とのいききも便利になって、町の会社や郊外の工場につとめる人が多くなつたからです。花子さんの家でも、にいさんは村の協同組合につとめ、ねえさんは町の銀行につとめています。

ったことによるのです。花子さんの村でも、そのことが強く感じられます。

(二) 田うえのころ



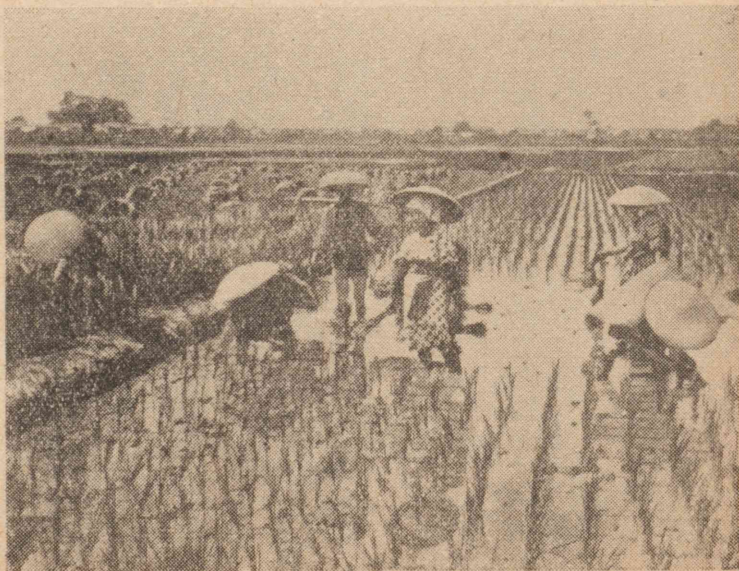
六月もなかばすぎると、もう、どこの家でも田うえのじゅんぴがはじまります。麦やばれいしょのとりいれのすんだたんぼは、うしやうまで、ほりかえされ、水がなみなみとはられてきます。するとまた、まぐわをひいたうしやうまが、どろ水の中をいったりもどつたりして、田の土をこまかくたがやしていきます。そのあとには、つぎつぎに肥料ひりょうもまかれます。たい肥などは、家ごとにつくるので便利ですが、金肥がた

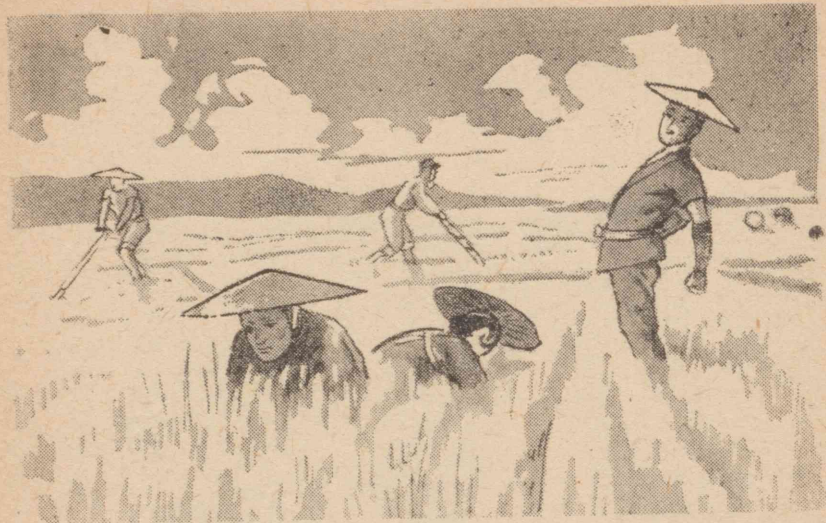
りないのには、どの家も苦心をするそうです。しかし、村の人たちは、一つぶでも多くとりいれたいと、いろいろくふうして、増産にはげんでいます。

つゆの雨がふりはじめると、広いたんぼは、きゆうににぎやかになってきます。いよいよ田うえがはじまるわけです。

この田うえほど、農家にとってたいせつな行事はありません。近所やしんるいの人々が、田うえの順番じゅんぱんをきめたり、てだすけについて相談するのもこのときです。

花子さんの家でも、田うえがはじまっています。





ぞいて、稲の分けつぶんを助けるのです。あの暑い日ざしをうけて、三回も四回もくりかえさなければ

月にかけて、田の草とりがつづけられていきます。

稲の根元のどろをかきまぜながら、雑草をとりの

「あ、そうそう、田の草とりがありましたね。」

花子さんは、思いだしたようにいいました。

「おじいさんがいうと、

「田の草とりだよ。」

「田の仕事がまっつているのですって」

「そうだよ。それに、田の仕事がまっつているよ。」

「田うえがすむと、こんどはいもうえですね。」

おじいさんは、元気に答えてくれます。

「うん、うちの田うえはこれですんだが、あすは、となりの田うえだ。」

「おじいさん、もう田うえもすんだのですね。」

に話しかけました。

こうして、せわしい田うえもおわったあるばん、えんがわで、花子さんはおじいさん

ほにはこんだりしています。

いそがしい中にもなごやかな田うえのありさまが見られます。

らひまをもらって田うえのおてつだいです。ときには、にぎやかなわらい声も聞こえて、

んで、せつせと苗をうえていきます。にいさんも、ねえさんも、この時はつとめさきか

たんぼでは、すげがさやあみがさをつけたおかあさんや近所の人たちが、一列になら

らこちらの田へくばっていきます。おばあさんは、すいじの仕事にいそがしいのです。

朝まだ暗いうちにおきたおとうさんやおじいさんは、苗代なひしろから苗なえをぬきとつて、あち

ならないのですから、その苦勞はたいへんです。

「でもね、花子。こうした日中のいそがしさの中にも、夜になると、村中総出のにぎやかなぼんおどりのけいこがはじまるよ。あれはまた、村の人々にとって楽しいものだね。」

と、おじいさんは、話してくれます。

そのとき、花子さんは、

「おじいさん、そうした村の行事を、村中総出でやるのはどうしてですか。と、たずねました。」

「そうだね——」

おじいさんは、ちよつと考えていましたが、

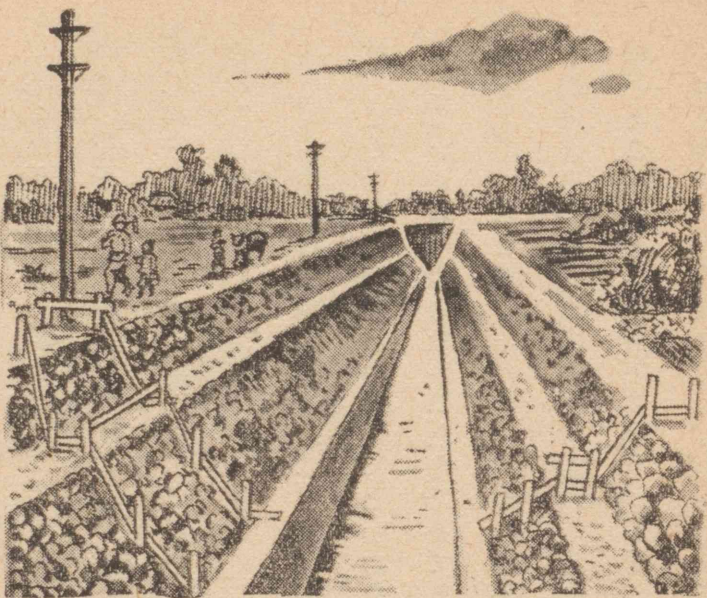
「それについては、村の仕事のようすを考えてみるのがたいせつだね。田うえでも、近所やしんるいの人々が集まってやっていたらう。ところがね、村の用水路の川さうえや、道路の改修などのような、大きな仕事になると、とても小人数ではできない

から、村の人々がたくさん出てやるわけだね。ことに大水にでもあうと、それこそたいへんなものだよ。こんな村の仕事を考えても、村の仕事には、たくさんの人々が力を合わせなければならぬこととがわかるだろう。」

と、いいました。

「つまり、こうした村の仕事や、村のいろいろな行事まで、総出でやるようにしてきたわけですか。」

「そうだよ。こうして村の仕事をいつしよにしていくうちに、村の人々は、また、おたがいに心がとけあつて、なごやかな村をつくってきたのだね。」



そのとき、つくえのところで、なにか書きものをしていたにいさんが、
「ほほう、話がはずんでいるね。」

と、いいながら、えんがわにやってきました。

「いま、花子に、村中総出でやるわけを話していたところだよ。」

おじいさんは、こういつてたばこに火をつけました。

にいさんは、

「そうですね。村中総出でやることは、村のもっともいいところですね。しかし、村では、まだむかしのわるい風習にとらわれていたり、迷信なども残っていて、もっとなおしていかねばならないこともあるでしょう。旅立ちなどのとき、げたのはなおが切れると悪いことがあるとか、朝からからすが鳴くと人が死ぬなどという迷信を人々の心からとりのけねばなりませんね。それに、台所やしん室だつて、むかしのままのうす暗いところにあつたり、食事だつてもつと改めねばならぬところがあるようですね。」

じつと聞いていた花子さんは、

「にいさん、めぼができたら、目にまめをはさんで、いどの中に落とすとなおるつてい
いますね。あれも迷信ですね。」

「そんな迷信はいくらでもあるようだね。迷信のため早くなおる病人がますます悪くな
つたり死んだりすることもあつたり、おそろしいことだね。」

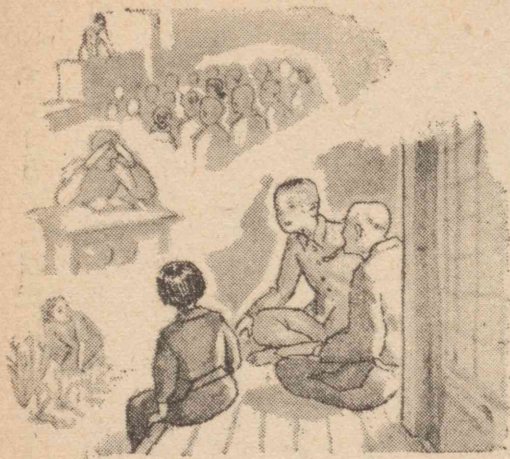
「にいさん、そんな迷信や悪い風習をなおして村の生活をよくするためには、どうした

らいいの。」

「そうだね。それには、まず、村の人々がおた
がいにひまをつくることだね。おたがいの日
々の生活をはんせいしてみると、時間をむだ
にしていることがあながい多いことに気づく
だろう。」

「ひまをつくつて、どうするの。」

「ひまといつてもただ遊ぶひまをつくることを



余暇の利用

いつているのではないよ。つまり、あまつた時間をうまく利用しようというのだね。農家の仕事はいそがしいが、心がけしだいで、いそがしい中でもひまをつくって、本を読んだり、よい話を聞いたりしていると、だんだん知識ちしきも広くなり、考えも深くなつてきて、これからの仕事も、うまく計画けいかくしてやっつけていけるようになるものだよ。こうなると、ただ古い習慣しゅうかんだけにとじこめられないで、明かるい村や国がつくられるわけだね」

にいさんは、力をこめて話してくれます。おじいさんも、うなずきながら聞いています。いつのまにか時計は、夜の十時をさしていました。

(三) 米の分布調べ

秋まつりもすんだある日、たんぼから帰って、えんがわでひと休みしているおとうさんに、花子さんは、

「おとうさん、ことしの米のできぐあいはいいんでしょう。」
と、話しかけました。

すると、おとうさんは、

「そうだね。ことしはまず豊年というところだな。二百十日も無事だったし、それにことしては、天候が順調じゆんてうで、水も多かったからね。それで稲の分けつもよくて、ずんずん大きくなったわけだよ。米のみいりもよいし、つぶも大きいようだ。なんといつても、米つくりには、天候と水とがたいせつだからね。」

と、話しました。

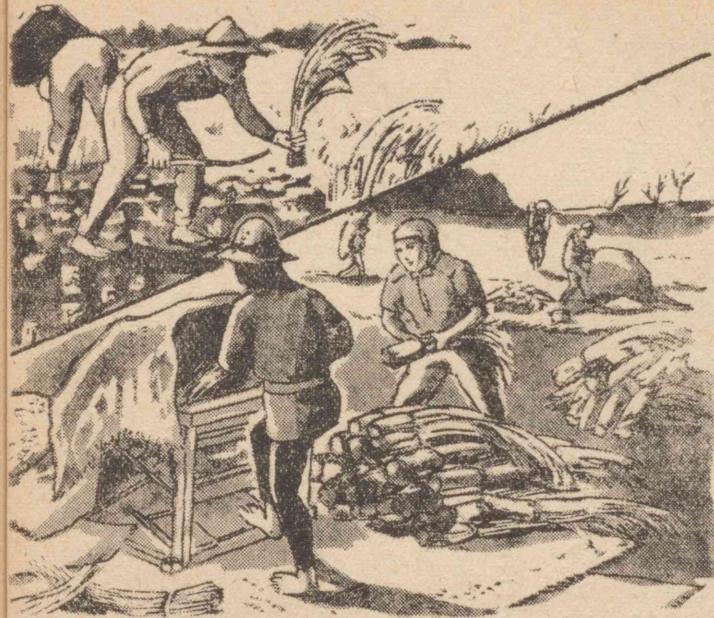
「もうすぐ稲かりでしょう。うちでは、いつからはじめるのですか。」

「二、三日したらかりはじめるよ。橋のたもとたんぼがよくじゅくしているの、あれがいちばんだね。いまも、おとうさんは、それを見にいつてきたのだよ。」

おとうさんは、こういつて、農具小屋の方へいきました。

よく晴れわたった秋空の下では、いま稲かりのさいちゆうです。男も女も、いそがしくはたらいています。

たんぼの中につくった稲かけには、かりとられた稲がかけてあります。向こうのたんぼからは、脱穀機の音も聞こえてきます。こうして脱穀したもみは、よくかわかした後、もみすり機にかけて、玄米にするので



す。今日では、発動機を使ってもみすりをするので、たいへん便利になってきました。

米の分布調べ

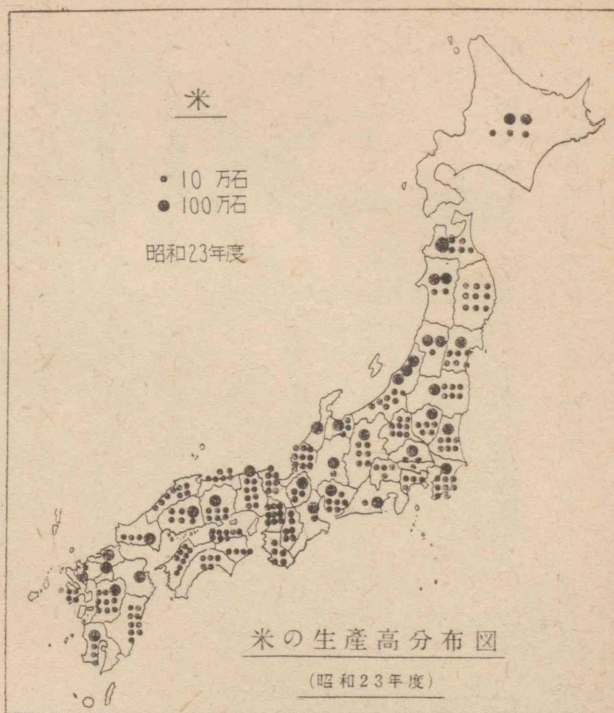
花子さんは、せわしいとりいれのでつだいをしているうちに、日本のほかの地方でも、このようにしてとりいれが行われているのだらうと思いました。

こう考えていくうちに、わが国の米の生産地について調べてみたいと思いました。つぎの分布調べは、花子さんがまとめたものです。

この調べによつても米の生産高の多いのは北海道や新潟、秋田、山形、福岡、熊本、兵庫、千葉、福島、茨城



いねかけ風景

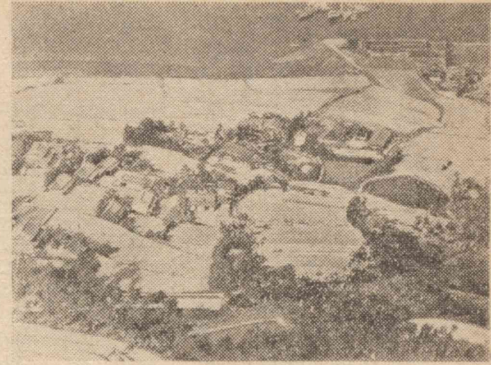


きました。

日本海がわの裏日本では、秋田県の横手平野、山形県の庄内・山形盆地、新潟県の越

後平野、富山県の富山平野、石川県から福井県にかけての海岸の平野などあります。太平洋がわの表日本では、宮城県の仙台平野、福島県の福島盆地、それに関東平野、濃尾平野がひろがっています。近畿地方から瀬戸内海にかけては、滋賀県の近江盆地、大阪府の大阪平野、兵庫県の播磨平野、岡山県の岡山平野、香川県の讃岐平野があります。九州では、福岡県から佐賀県にかけての筑紫平野、熊本県の熊本平野などがあります。また、北海道には上川盆地・石狩平野があります。これらの平野や盆地は、土地が平らかで、そのうえ水の便利がよいので、たくさんのお水田が分布することになるのでしょう。その中でも、越後平野のある新潟県は米の産額が多くて、わが国府県中第一位をしめています。にいさんの話では、越後平野をかりいれのところ旅行すると、たんぼのあぜのはんの木を利用した稲かけに稲のかけられた風景がみられ、さすが米どころだとの感じを深くするそうです。しかし、冬の雪の多いこの地の平野では、米のあとに麦はほとんどつくりません。

愛知、岡山などの諸県です。これをさらに、上の分布図によって見ると、米は全国に広くつくられています。生産高の多い地方がかたまつて分布していることがわかりました。そこで、これらの地方に、どうしてたくさんのお米が生産されるのだろうかと思つて、地勢図を見ると、これらの地方には、平野や盆地の多いことに気がつ



かいだん状の水田

このように水田は、多く平野や盆地に、ひらけていますが、山の中腹や谷あいにも、かいだん状の水田が見られます。に
いさんにこのことをたずねると、

「日本では、平野や盆地だけでなく、この村でも見かけるよ
うに、山のけいしゃ面にもたくさん水田が、ひらかれてい
るね。ところが、こんな土地で

は水の便が悪いので、ため池を
つくったり、ずっと川上から水

をひいたりして作っているのだよ。つまり、水さえひき入
れることができる、水田が作れるというわけだね。」

と、話してくれました。

米の生産と消費

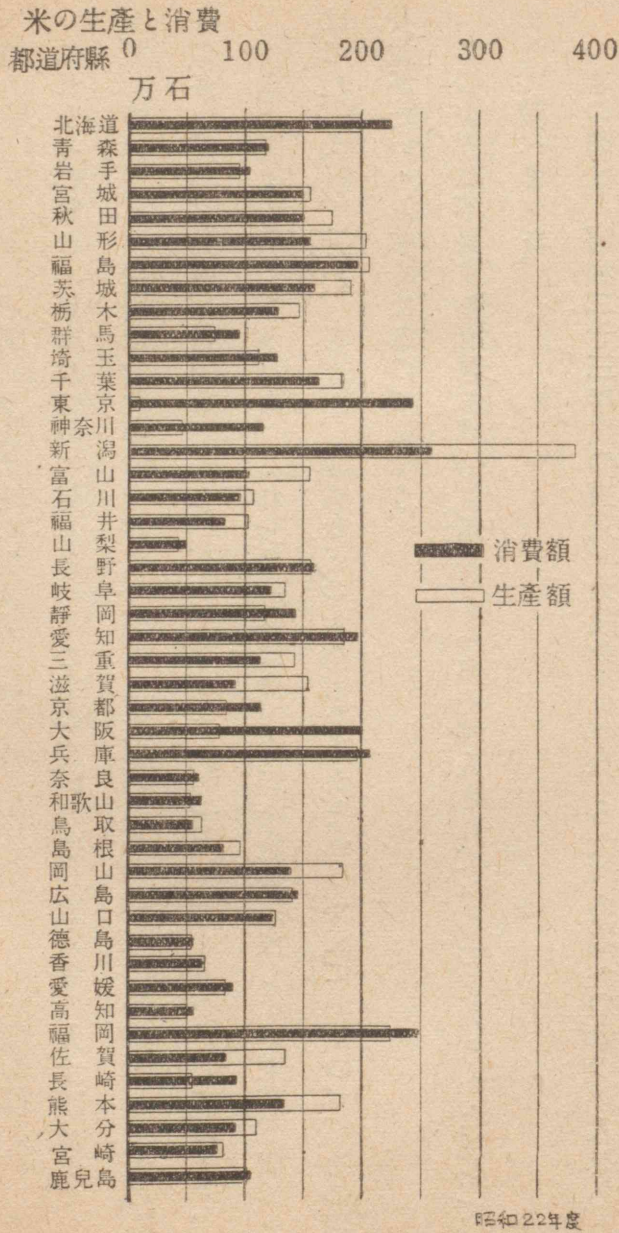
つぎに、こうして作られた米は、どのように消費されてい



ため池

るのだろうかということについても調べたいと思いました。

つぎの表は、わが国の都道府県別の米の生産高と消費高をあらわしたものです。



まず、わが国で米のあまっている県は新潟、滋賀、山形、佐賀、富山、熊本、岡山、

秋田などの諸県です。つぎに不足している府県は、東京都、大阪、神奈川、福岡、長崎、京都、群馬、静岡、兵庫、愛知などの諸府県です。

これをその県の不足率について見ると、その率の高いのは、東京都の九十四パーセントで、ついで、神奈川や大阪の六十パーセントです。しかも、わりに府県として米の生産の多い愛知、兵庫、福岡などでも、五パーセントから十パーセント不足しています。このことをよく考えてみると、これらの府県には、食料を直接生産しない東京、横浜をはじめ、大阪、神戸、名古屋、福岡などの大都市をそれぞれひかえているので、その消費量がたいへん多くなるのでしょう。

このように不足する府県では、どの地方から多く移入されているのだろうかと思つて、また、調べました。

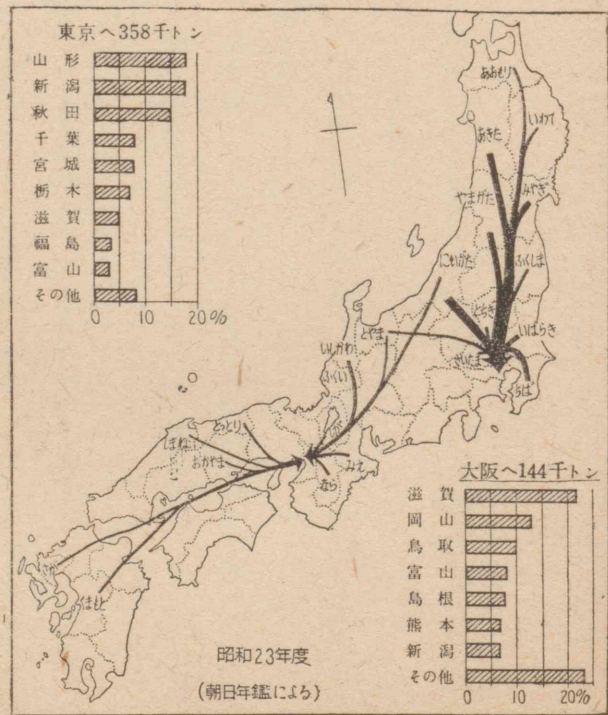
つぎの図は、昭和二十三年度の東京・大阪を中心とする大消費地への米の移入をあらわしたものです。これによると、東京都には、その近くの諸県からも移入されていますが、新潟・秋田・山形・富山などの米の生産県からたくさん移入されています。また、

滋賀・岡山・熊本・佐賀などの諸県からもいくらか送られています。

大阪府には、おもに滋賀県・岡山県から移入されていますが、熊本・佐賀をはじめ、新潟・富山・福井・石川などの諸県からも送られています。

なお、神奈川県には、新潟・富山をはじめ、山形・秋田・福島・栃木・滋賀の諸県から送られ、福岡県には、近くの佐賀・熊本から移入されています。

こう調べてくると、新潟・富山などの北陸の米の産地では、東京や大阪をはじめ、そのほかの府県に送っていることがわかります。そうして、これらの輸送をなめらかにし



ているのは、また、なんととっても交通の発達にあるといわねばなりません。

学習の手びき

- (一) 自分の村や町のふきんには、どんな都市がありますか。そして、それらの都市と自分の村や町とは、どんな関係があるか、調べてごらん下さい。
- (二) 都市近郊の村と、それ以外の村とは、そのおもむきがちがっていますね。どんなところに大きなちがいがあるか、まとめてごらん下さい。
- (三) 郷土のおもな行事についてまとめてみましょう。そして、そのいわれについて調べてごらん下さい。その中には、都会的なものと農村的なものとをみることもできるでしょう。それについていろいろ話しあってみましょう。
- (四) むかしからのしきたりやならわしで、いまなお残っているものがありますね。どんなものが多く残っているか、自分の郷土について調べてごらん下さい。また、その中に改善工夫する点もあるでしょう。どのようにしていったらよいか、話しあいましょう。
- (五) 迷信といわれるものは、たいていとるにたらないものですね。ところで、それがいかに自分や自分の周囲の人たちの心をとらえているかを、実例によって調べてごらん下さい。

二 さりいれを終えて

(一) 秋のみかん山

十一月の中ごろ、花子さんは、ねえさんと島のおばさんのうちへいくことにしました。島では、ちょうどみかんのさかりで、おばさんからも手紙をいただいていたのです。

市内電車の終点でおりた花子さんたちは、さん橋に着きました。きょうは日曜なので、船には、もう、かなりたくさんの人が乗っているようです。

七時すぎ、船はいよいよ動きはじめました。四国にわたるこの船は、島々のいくつかの港に寄港していくのです。船は岬みさきをまわり、島かげにかくれながら港をぬって進みます。船が港を出てから三時間あまりもたつたころ、ねえさんが向こうの島をさしながら、「花子さん、あれをごらん。」

と、よびかけました。

「まあきれいなね。みかん畑でしょう。」

花子さんは、はずんだ声でいいました。島のこいみどりに、黄色の点々とまじったみかん畑が、くつきりと見えています。

船が島の岬をまわると、みかん畑は、いよいよ美しさをまします。よく見ると山いちめんが、だんだん畑になっていて、そこのみかん畑のひらけていることがわかりました。向こうの島にも、みかん畑が見えています。

「ねえさん、どうしてこんな島に、あれほどみごとなみかん畑がつくられたのでしょうね。」



みかん山

と、花子さんが、たずねました。

すると、ねえさんは、

「こんな小さな島は、川もないので水田はできず、しぜん、畑がつくられるのでしょう。みかんなどの果樹かじゅをつくることは、畑作ではたいへん有利なのですからね。それに、この瀬戸内海の地方は気候があたりかくてみかんの栽培に適していることや、島の人たちのみかんづくりに熱心なことなどが原因になっているのですよ。くわしいことは、あちらでおじさんからよく聞きましようね。」
こういつて港の方を見ました。

船は、まもなく港に着きました。船つき場に出むかえたおばさんは、

「まあ、よくきましたね。つかれたでしょう。」

と、いいながら、花子さんたちを家へあんないしてくれました。

昼ごはんをいただいた花子さんたちは、おじさんといっしょに、うらのみかん山にのぼりました。山の上まで石がきてしきつただんだん畑には、みかんがすすなりになっています。船の上からながめた美しさとは、またかわったおもむきです。

あまりみごとなので、しばらくみとれていた花子さんは、おじさんに話しかけました。

「おじさん、たくさんなっていますね。」

「うん、ことしはなり年だったからね。まあ、ここへかけなさい。」

こういいながら、おじさんはみかんをもいでくれました。

ひとふくろ口にいられたおじさんは、

「どうだね、おいしいだろう。このみかんはね、わせ温州うんしゅうとって、ほかの地方のものよりも早くみのるのだよ。このみかんは、明治二十五年に大分県でつくりだされたものといわれている。それをこの村の人がもちかえって、熱心に栽培をはじめてから、今日のようにさかんにつくられるようになったのだ。いまから考えてみると、ほんとうにありがたいことだ。」

ここまで話したおじさんは、ちょっと考えたようにして、またいいました。



みかんの山

「それにしてもね。こうしたみかんをつくるには、いろいろな苦労があるものだよ。」
「みかんづくりの苦労って、どんな仕事があるので
すか。」

「こんどは、ねえさんがたずねました。
「そうだね。みかんでだいじなことは、なんといっ
ても味だからね。よい味をもたせるためにたいへ
ん手がかけられるのだよ。みかん畑がよく南向き
の日あたりのよいところに見られるのもそのため
だ。それにだいじなのは肥料だよ。ちょうどみか
んの芽が出はじめたころ、そのまわりをほって肥
料をやるのだが、この肥料のやり方でみかんの味もちがってくるからね。」

また苦労するのは、かいがら虫のくじよだね。これをくじよするための殺虫剤くつちゅうざいのさ

んぷは、手のかかる仕事だよ。そのほかいろいろの虫がいるので、ときにはうすいあ
ぶら紙でみかんの木をおおい、くすりでいぶして殺虫することもあるよ。遠くの海や
島から見ると、それがちょうどテントでもはったように見えるそうだからね。」

「すると、みかんのていれもたいへんですね。」

そばで、じつと話を聞いていた花子さんがいいました。

「みかんばかりじゃないよ。ももだって、びわだって、そのていれはなかなかだからな。」

この島も、みかんづくりをはじめの前にはももをうえていたのだがね。」

と、おじさんは、いろいろ話してくれます。

こうして、おじさんの話を聞いていくうちに、花子さんたちは、みかんづくりのよう
すがだいぶんわかつてきたようです。

「では、おじさん。このふきんの島でつくられたみかんは、どの地方に送られるので
すか。」

花子さんが続けてたずねました。

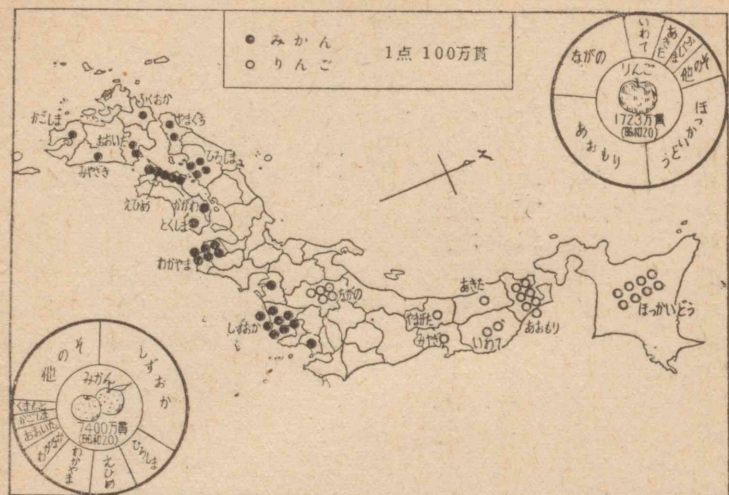
「だいたい西日本一帯だが、なんとといっても京阪神地方が多いね。この地方は人口が多いので、みかんの消費も多いわけだよ。あと十日もたつと、島の港には、みかんはこの山がうず高くつまれるよ。この島だけでも、三百そうのみかん船があるといわれているからね。たいしたものだろう。」

「では、京阪神地方の人は、このふきんの島でつくられたみかんをたべているわけですね。」

「まあ、そうもいえるがね。しかし、この地方に近い和歌山県も、たくさんみかんをつくっている。とくに有田川流域はその栽培の中心地だね。これが有名な紀州みかんだ。この地方は大阪や神戸などの消費地に近いので、これらの都市にたくさん送るのだよ。つまり、京阪神地方には、広島のみかん、和歌山のみかんがたくさん送られることになるわけだね。」

「すると、東京や横浜の地方にも、やはり、広島や和歌山のみかんが送られるのですか。花子さんが、かさねてたずねました。」

みかんとりんごの分布図



「そうそう、少しは送られているがね。でも、京阪神地方には、近くの静岡県にみかんの生産地があるので、なんとといっても、その地方のみかんがたくさん送られることになるよ。」

駿河湾沿岸は、日本でもいちばん多量のみかんがつくられるところで、「みかんと茶」といえば、静岡県の特産とさえいわれているくらいだからね。ただ、気候の関係で、みのる時期は広島や和歌山地方のみかんにくらべて少しおくれることになる。そこで、静岡のみかんが東京市場に顔をみせないうちに、広島や和歌山のみかんが進出するというわけだね。それに、みかんの味は人のこのみにもよるからね。」

「そうすると、静岡・広島・和歌山の三県が、わが国のみかんの三大生産地ということになりますね。」

「そうだよ。だが、みかんは東北や北陸の寒い地方をのぞくと、広くつくられるので、ほかにも愛媛県の伊豫みかん、大分県の津久見みかん、熊本県の河内みかんなどの生産地があるのだよ。」

ねえさんは、なるほどといったようにうなずいています。

花子さんは、

「では、やはり東北にも、こんな地方のみかんが送られるのですね。」
と、また、たずねました。

「そうだ。みかんは正月には、わすれることができないもので、冬のくだものとしてこのまれているだろう。それで、みかんのつくられない東北にも、これらの産地からたくさんのみかんが送られているのだよ。ところが、かわりにこんな地方から、りんごが送られることを知っているかね。」

おじさんは、こういって花子さんを見ました。

「ええ、知っています。東北地方はりんごの産地でしょう。」

「みかんは南の国のくだものだが、りんごは北の国のくだものだね。だから、みかんの木を見る地方では、りんごの木を見ることができないし、りんごの木を見る地方では、みかんの木を見ることができないのはおもしろいことだろう。」

花子さんは、おじさんの話を聞いて、なるほどと思いました。

「りんごは、東北地方でもどの地方にたくさんつくられるのですか。」

「それはなんとといっても青森県だな。なかでも弘前ふきんのりんごが有名だね。近ごろは長野県からもたくさん送られるようになった。この地方のりんごでは、ずっと南の九州にまでたくさん送られているよ。」

「では、南のみかんが、東北に送られるのにたいして、北のりんごは、西南に送られるというわけですね。」

「そうそう、なかなかいいところに気がついたね。なにしろ、みかんとりんごは、わが

国でいちばんこのまれるくだものだからね。ところが、日本にりんごが栽培されるようになったのは、明治時代にはいつてからのことなのだ。北海道と青森県にアメリカから苗木をとり入れたのだが、これがこの土地の気候によくあっていたし、また熱心に栽培したので、いまみるようにさかんになったのだよ。だからりんごは新しいくだものといえるね。これにくらべてみかんは、ずいぶん古くからつくられているからね。まあ、新しいりんごに古いみかんともいえるわけだよ。」

おじさんは、こういつて、また大きなみかんを花子さんにくれました。

「だいぶんがなくなったな。家ではおばさんも待つているだろう。では、おりにしよう。」

二人は、おじさんのことばにうながされて、坂道をおりていきました。

(二) 秋から冬へ

稲のとりいれがすむと、たんぼの風景はすっかりおもむきをかえます。こがね色の波にかわつて、たんぼは久しぶりに土色の地はだをあらわします。

しかしまもなく、この土色のたんぼは、またたがやされて麦がまかれるのです。晩秋のやわらかな日ざしをうけて、うしやうまがいせいよくほりおこしていきます。やがてほりおこしがすむと、こんどはくれうちです。すきでほりおこしたままの土は、大きくかたまっているのです、これをくだいてこまかくしていくのです。

このくれうちもすんで、たんぼがたがやされると、いよいよ麦をまきます。きれいにつくられたうねの上に、すじをひいたようにたねをおとしていきます。うねにそつて長くまくとたてまきになり、よこにまくとよこまきになります。このごろでは、たてまきが多くとられ、そのためにかんたんな手おしの麦まき機械も使われるようになります。種まきが終るとつみごえや灰はいをまいて、うまく土をかけていくのです。稲は、いち

ど苗代にまかれて成長した苗を田にうえなおしますが、麦はこのように種のままたんぼにまかれます。これは稲づくりと麦づくりとの大きなちがいです。

こうして麦まきも終ると農家にはいよいよのときがやってきます。十二月の中ごろからあくる年の春ごろまでは、ときどき麦や野菜のていれをすることや、わらしごとをするのがおもしろいことです。

十二月のある日の午後のことです。

米の供出を終えて、帰ったおとうさんに、花子さんが話しかけました。

「おとうさん、おつかれだったでしょう。」

「これでひとまず安心だよ。麦まきは終わったし、米の供出もすっかりすんだからね。天候さえよければ、麦も順調に成育してくれるだろうし、いよいよ正月をむかえるばかりになったわけだよ。」

おとうさんは、荷車を小屋にかたづけながら、こういいました。

花子さんは、えんがわで、花子さんのもってきたお茶をのんでいるおとうさんに、

「麦には、どんな天候がたいせつなのですか。」

と、たずねました。

「そうだね。昨年のようにあたたかすぎると、茎^{くき}だけがのびて根ばりがうまくいかず、実入りはかえってよくないよ。麦には、冬の間のてきとうな寒さが必要なんだよ。それに、また麦づくりには、水が多すぎて、土地がしめりすぎるのもいけないね。この村でも、駅のあたりに、たんぼがじめじめして、麦のつくられないところがあるだろう。」

「ああ、駅のふきんのたんぼですか。でも、かなりのしめりけのあるたんぼでも、高いうねをつくれれば麦がつかれるのでしょうか。」

「そうだよ。いいところに気がついてるね。あんなしめつたたんぼでも、うねを高くすると麦がつかれるわけだ。」

花子さんは、しばらく考えていましたが、

「では、麦のつくられない地方は、しっけの多い地方なのですね。」
と、かさねてたずねました。

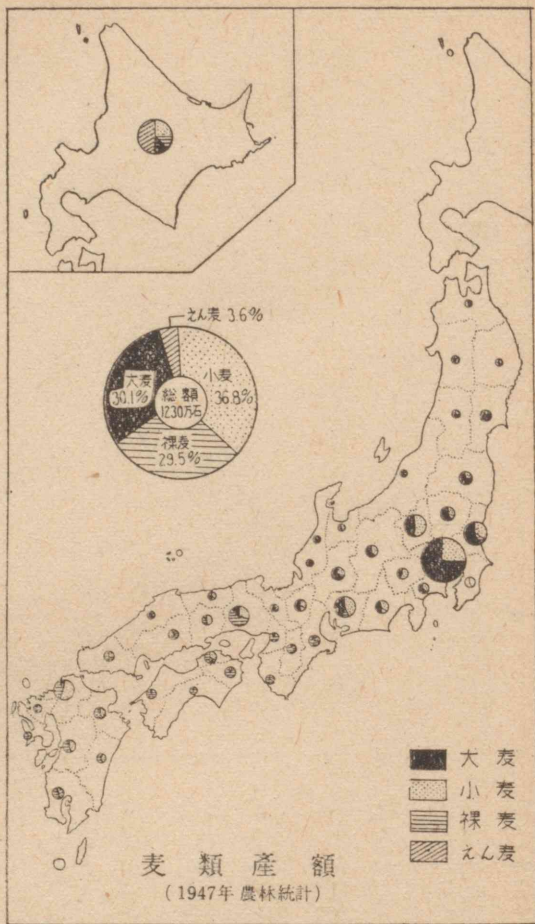
すると、おとうさんは、
「いちがいにそうともいえないだろうよ。土地によつては、まだいろいろなわけであらう。」
と、いいました。

花子さんは、おとうさんと話しているうちに、日本の麦のつくられる地方について調べたいと思いました。

花子さんは、にいさんから地図帳をかりて調べました。つぎの「麦の産地」は、花子さんがまとめたものです。

麦の産地

つぎの地図を見ると、麦は、北の北海道から南の九州までつくられているようです。

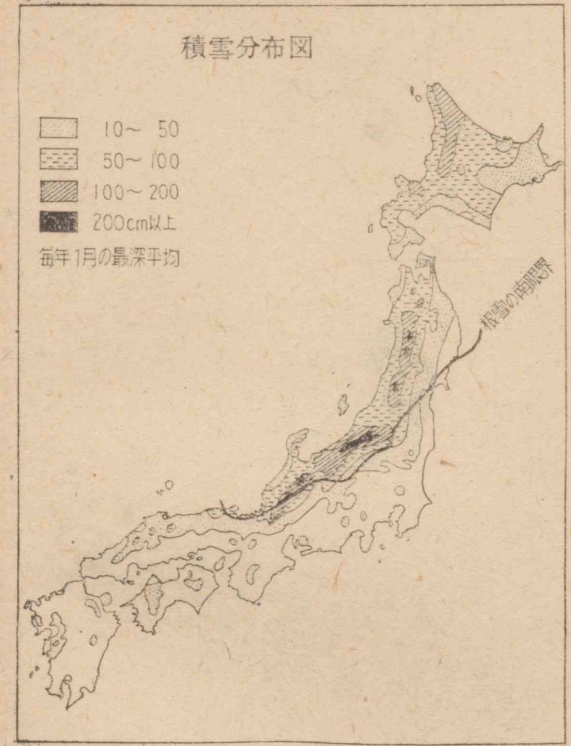


しかし、よく見ると、これは表日本でいえることで、裏日本、ことに北陸地方ではほとんど麦がつかられていないことに気がつきます。これをさきに調べた米の分布とくらべ

てみると、米がほとんど全国に広くつくられているのに、麦は表日本に多くつくられていることがわかります。表日本でもいちばん生産の多いのは関東平野で、ついで濃尾・筑紫・熊本などの平野に多く、北海道にもかなりの麦がつかられています。

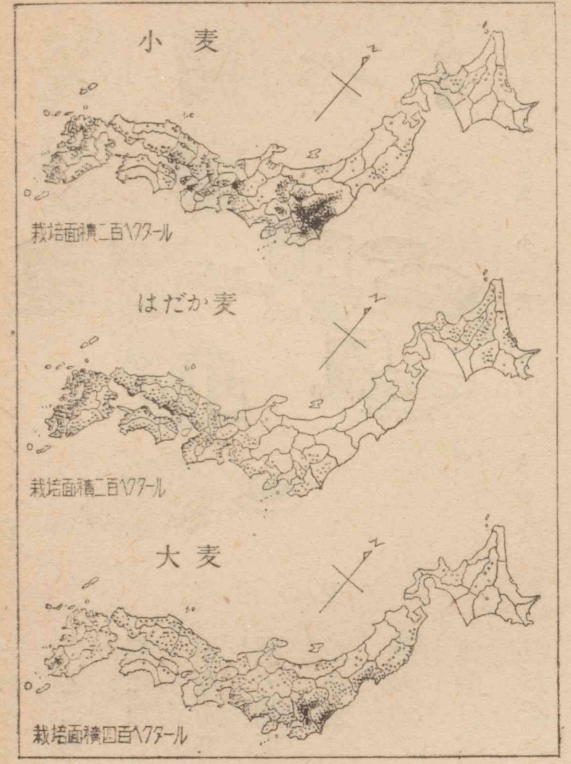
このように調べていくうちに、表日本にはたくさん麦がつくられるのに、裏日本では、

なぜ麦がつくられないのだろうと思いました。この村でも、駅のふきんのしめった田には、麦のつくられていないことから考えて、裏日本にもきつとこんな湿田しつてんが多いのだろうと思いましたが。しかし、こんな湿田が裏日本一帯にひろがっているわけがありません。この村でも、湿田はごく少ないのです。



このとき、米の分布を調べたことから、裏日本は冬に雪が多いから麦がつかれないのではないかと思いましたが。つまり、稲のとりいれあとの麦をまいても、深い雪のために生長がおくれるだろうし、雪のとけた春にまいたのでは、米をつくることのできないと思いましたが。それ

で、米をつくるためには、同じ年に麦をつくることのできないということがわかりました。つぎに、どの地方にどんな麦がつかれているのだろうかと思つて、地図のページをひらいていくと、つぎのような分布図がみつかりました。



これによると、麦には、小麦・大麦・はだか麦、それにえん麦けんなどの種類があつて、その産地もまたちがつていことがわかります。

小麦は、麦の中でもいちばん産額が多くて、北海道から九州まで、表日本の一帯に、広くつくられています。小麦はパンやうどんやかしなどにつくられて、麦の中でも食生活との関係が深いので、こんなに広くつく



大 麦 はだか麦 小 麦 えんばく 麦 わら

麦 の 用 途

られることになるのでしよう。
ところが、おもに米との混食こんじくや家畜かちくの飼料しりょうになる大麦とはだか麦は、小麦の分布とかなりちがっています。大麦が北海道・奥羽おくう・関東・中部の東北日本に多いのに、はだか麦は西南日本の近畿・中国・四国・九州の地方に多くつくられています。これは、西南日本が温暖であるのに、東北日本は気温が低いことによるのでしよう。

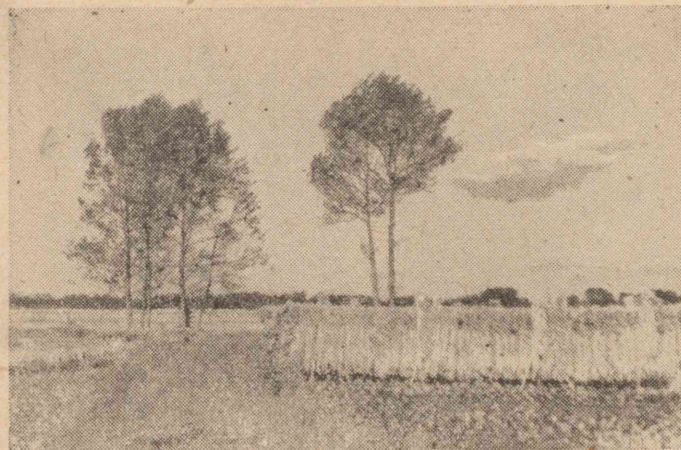
えん麦えんばくは、寒い北海道につくられていて、おもに家畜の飼料になっていますが、オート・ミールなどにつくられて食用にされるものもあります。

このように調べていくうちに、土地によってつくられる麦の種類も産額も、ちがっていることがわかってきました。また、その用途についても調べて、上のような絵図にま

とめました。

花子さんは、いままでの調べから米や麦の産額や分布がはっきりしてきました。ところが、国内に産する食糧だけでは、国民の需要をみたすことはできないのです。それで、さいきんあちらこちらの村々では、山や野をきり開いて新しい田畑もつくっているようです。こんなことを考えているうち、もっと大きほに開拓かいたくされたところはないのだろうかと思つて、先生にたずねました。すると、先生は、つぎのような話をしてくれました。

(三) 開拓村の話



上川盆地の村落

この絵を見ると、まっすぐに走る道路、ごぼんの目のようにきちんとならんだ畑があつて、わたくしたちが、ふつうみる農村とかなりちがつた風景であることがわかるでしょう。これは、北海道の上川地方の農村なのです。

北海道は、明治時代にはいつてから開けたところですから、いまみる農村のほとんどが開拓の村といふことができるでしょう。山林や原野をきりひらいて新しい村をつくつていくのは、たいへんこんなな仕事でしょう。では、北海道の農村は、どのように開拓されてきたでしょうか。

北海道の開拓

北海道には、いまおよそ三百八十五万ばかりの人が住んでいますが、明治のはじめごろの人口を調べてみると、わずか十万人あまりにすぎませんでした。わずか八十年あまりのあいだに、このような人口の増加をみたことは、じつにおどろくほかありません。これは、この土地をきりひらくために、本州・四国・九州からたくさんの人が移り住んだからです。

北海道は、わが国の最も北にあつて寒い地方です。ことに西の日本海がわでは、冬たくさんの雪がふります。こんなことが原因で、さきのように明治のはじめごろまでは、住む人が少なかったのです。ただ、青森県に近い渡島半島の地方では、本土からうつり住んだ人たちによつて、わずかな畑がつくられて、農業が行われていました。こうした開こん地をのぞくと、少数のアイヌ人の住む未開の土地だったので。山地には、えぞまつ・とどまつなどの原始林がしげり、原野にはくまざさや雑草が、人の背たけよりも

高くおいしげっていたのです。そして、これらの山地や原野には、くまやきつねなどがすんでいました。

このようなありさまですから、明治のはじめごろまでは、北海道といえば農業の行われない地方だと考えられていました。いや、この考えは明治時代はかなり後まで、たくさんの人々の頭の中にあつたのです。ところが、わが国の人口の増加を考えると、ほとんど開きつくされた本州・四国・九州の土地で、たくさん的人口を養っていくことはほんなんなことがわかりました。そこで、この未開拓の北海道をきりひらいて新しい農村をつくることをくわだてました。

これは明治二年（一八六九年）のことです。各地から集まった開拓民の人たちは、原始林をきりたおし、くまざさを焼きはらいながらくわをふるいはじめました。ところが、さきにいったような寒い冬をもつこの土地で、丸木とかやの堀立小屋で寒さをしのぎながら、とぼしい食料をたよりにくわをふるうことは、たいへん苦勞の多いことでした。

しかも、こうしてきりひらいた畑が、よい収穫をあげるようになるまでには、かなり

の年数を要します。また、気候の関係で、北海道で農業の行われるのは、だいたい五月こ

ろから十一月ごろまでに限られています。

その上、冷害による凶作もたびたびあつたのです。

大地をひらく

明治十九年になると、北海道庁がおかれ、不毛の原野はどしどし開拓されていきました。その後は年をおって移民の数は増し、耕地はふえ、農作物もゆたかになっていったのです。明治二十七年（一八九四年）、はじめて米の生産をみるようになりました。これは北海道の農業の発達にとって、じつにすばらしいできごとだったので、この

ことは、北海道におけるかずかずの開拓の歴史のなかでも、ことにたいせつなことなの

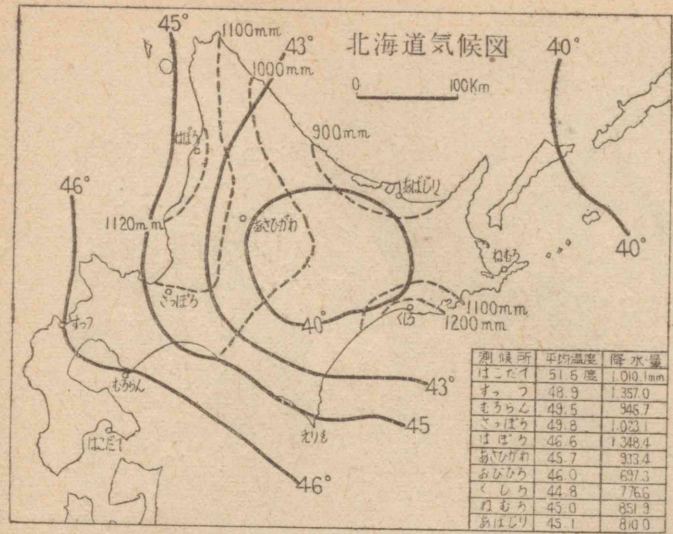


です。開拓の進むにつれて、人々が米の栽培をしようと思ったことはとうぜんのことでしょう。しかし気候にめぐまれないこの土地で、米をつくることはじつにこんなんなこと

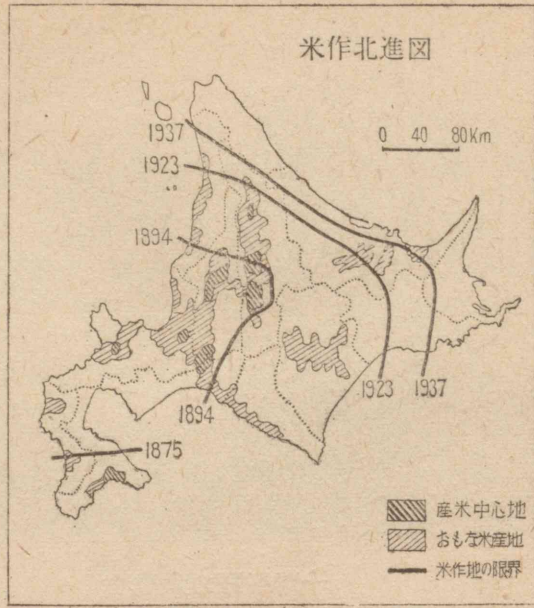
としていた。新しくできた農事試験場や、熱心な開拓民の手によって、米をつくるために血のにじむような努力が続けられたのです。

ころみに植えられた稲も秋になると、寒さのためにほとんどかかれてしまいます。しかし毎年、こんなことを続けていくうちに、完全にみのった稲穂のいくつかとれます。つぎの年には、この稲穂のみを種にして稲をつくっていくのです。

このようになん年もかかって研究した結果、寒い北海道にもよく育つ稲ができたのです。こうして、明治初年には半島南部のごく一部にしか栽培され



米作北進図



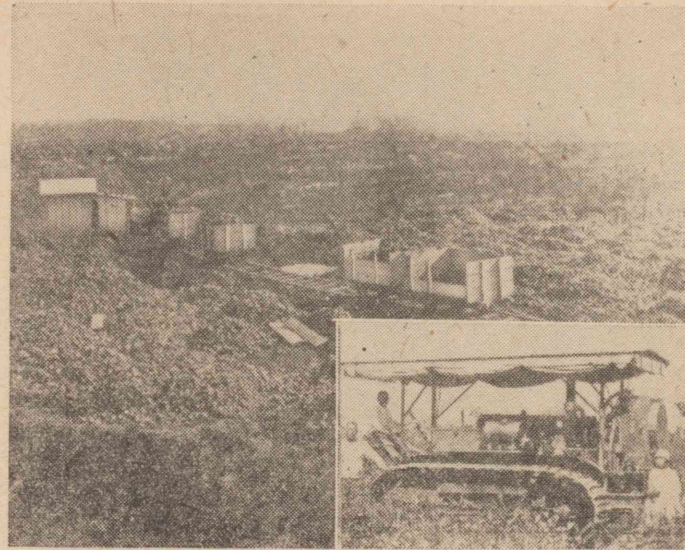
なかつた稲が、今では東部沿岸の一部をのぞいた全道につくられるようになって、新潟県につぐ産額をあげるまでになりました。これにはまた、耕作法の研究もわずれてはなりません。

生育期のみじかい土地に適するように、はじめは直播法がとられました。これは、苗代をつくらず、水田にじかにもみ種をまいていく方法です。この方法によると稲の

成長ははやいのですが、収量は少ないのです。だから収量をますためには、どうしても苗代法によるほうがいいのです。こうした必要から温室に苗をつくって、これを移植することも考えられました。

北海道の農業で米作とともに有名なのは、十勝平野の農法です。この平野は土地も広

大なので、はやくからアメリカ式の大農法をとりいれて、うまや機械の力によって、大きな農場を經營けいえいしてだいでんさい・ばれいしょなどがたくさん産出されています。



十勝平野の大農法

北海道の農産物を見るとき、りんご・アスパラガス・グリーンピースなどアメリカから輸入された西洋種の作物の多いことから、アメリカからの援助えんじょがどんなに北海道の開拓に大きなやくわりをはたしたかを知ることができます。

北海道の開拓で、また、わすれてならないのは新しく開かれた牧場でしよう。牛乳やバターさとうの生産で名高い札幌さっぽろふきんの石狩いしかり平野では、ととのった乳牛の牧場が見られますし、根室ねむろ・釧路くしろの平野などには、いた

るところにうまの放牧が見られます。



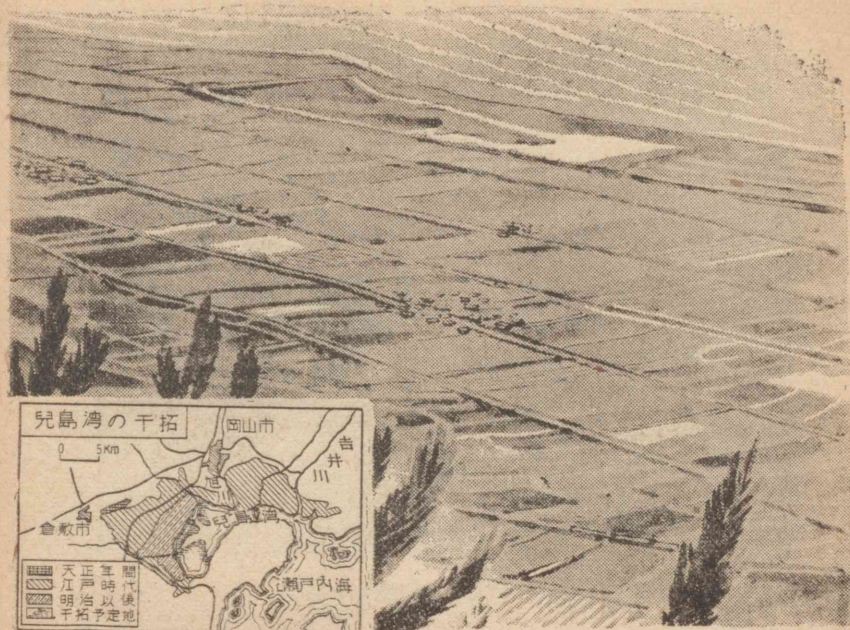
武蔵野台地

ところで、北海道は、日本海方面・オホーツク海方面、太平洋方面、それに内陸の盆地では、その土地の性質も気候きこうの状態じょうたいもちがいますので、その開拓の歴史も、それぞれがっています。このように北海道が開かれていったあとをみると、「南から北へ」そして、「西から東へ」開かれていったことがわかります。

では、北海道のほかに、このように新しく開かれた村はみられないでしょうか。

いろいろな開拓村

わが国では、平野や盆地はふつう土地が平らかな上に、水利にも便利なので、はやく



から耕地が開かれて、米や麦や野菜などがつくられてきました。しかし、台地や山のふもとなどの原野などでは、その開発がおくれました。したがって、これらの地方にできた村々には、わりあい新しいものが多いのです。こんな村は江戸時代になってできた村が多く、新田開発の村といわれています。このような新しい村は、また、海岸や川口近くのしめりけの多い土地や、浅い海の干潟などにもつくられました。

世の中が開けてくるにつれて、人々の生産意欲は高まり、しだいに新しい土地

の開拓につとめるようになりました。ことに明治時代になって、いろいろの技術が進むと、このような事業が各地に行われました。

こんな地方で有名なのは、関東平野の武蔵野台地や阿蘇山のふもとの開こん地、有明海沿岸や岡山県の児島湾の干拓地、印旛沼（関東地方）や巨椋池（京都府）の埋立地などです。

水の便利でない台地や火山のふもとの開こんもなかなかですが、海岸や湖沼を埋めたるのも大きな工事です。ことに海岸を埋めたるときには、高潮や津波にそなえるためにけんごな堤防をつくらねばならないので、この工事は、なかなかたいへんだつたのです。

これらの地方は、いまでは、りっぱな水田や畑になっていて、たくさん農産物をだしています。

学習の手びき

- (一) わが国には、いろいろなものがつくられていますね。みかんとりんごのほかに、どんなくだものがとれるでしょう。その有名な産地はどこでしょう。こんなことを調べて、くだもの分布図をつくりましょう。
- (二) 米と麦のつくり方には、いろいろちがったところがあるでしょう。そのちがいについて、くわしく調べてみましょう。
- (三) みなさんの住んでいる地方には、新しく開かれた村がありませんか。こんな村があつたら、その村をたずねましょう。こんな村の人たちの生活と、ふつうの農家の生活はどんなにちがっているでしょう。
- (四) 農事試験場や林業試験場・水産試験場などのある地方では、これらの試験場に行つて、そこでどんな研究が行われているかを見学し、また、いろいろ話を聞きましょう。
- (五) わが国は米作法のよく発達した国で、ことに明治時代にはいつてからの米の産額の増加はいちじるしいものです。このように米作法が発達し、その産額が増加したのは、品種の改良によるところが大きいのです。米の品種改良がどんなに行われたか、現在、日本各地で、どんな品種の米がつくられているかなどについて調べてみましょう。

三 漁港をたずねて

(一) 魚の水あげ

花子さんは、夏休みにおかあさんといっしょに、おじさんの家へいきました。おじさんの家は、海べの町にあります。

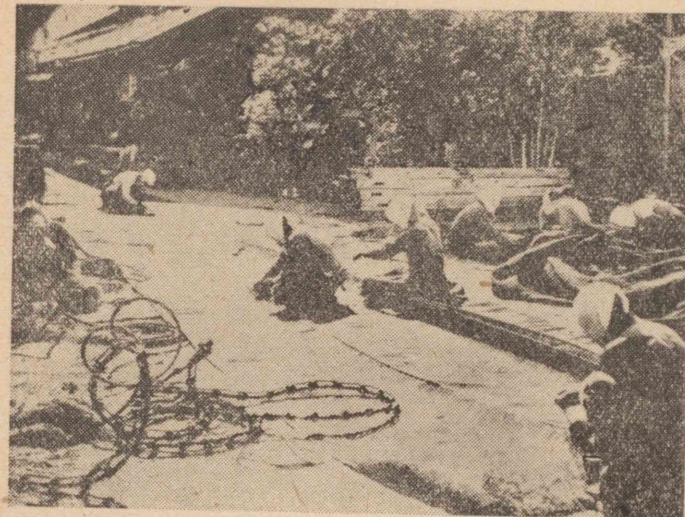
駅をでると、前の方に広々とした海が見えて、強いそのかがしてきます。まっ白にかわいてすなほこりのする道をいくと、両がわの家々には、むしろやぎるの中に小魚のほしてあるのが目につきます。

花子さんは、家の間のあき地に、茶色になつた海草がうず高くつんであるのをゆびさして、

「おかあさん、あそこに海草が山のようにつんでありますね。あれは、なににするので

すか。

と、たずねました。



網の手入れ

おかあさんは、
「よくかわかしてから、肥料にするのですよ。
海草の灰は、たいへんよい肥料になるので
すからね。」

と、話してくれました。

ぷーんと、りょうし町らしいなまぐさいに
おいがしてきます。海岸にいらんだ船の上
には、長い網あみがほしてあります。

「まあ、ずいぶん長い網ですね。あんな網で
なにをとるのでしょう。」

花子さんは、めずらしそうにたずねました。

おかあさんはちよつとたちどまって、

「花子さんも、なまえくらは聞いているでしょう。あれが、いわしなどをとる地引網じびきあみ
というのですよ。」

と、教えてくれました。

こんな話をしているうちに、家なみのつづいている町の中にはいり、まもなくおじさ
んの家に着きました。

魚の水あげ

花子さんは、おじさんにおねがいして、そのよく日、魚の水あげを見にいきました。

おじさんは、町の漁業組合の理事をしています。

おじさんの家をつたのは、まだ夜のあけないうちでした。うすぐらい町の中は、ひつ
そりとしています。町はずれにある魚の水あげ場までは、ここから二十分ほどかかり
ます。

「ずずしくて、きもちがいいから海岸の道をとっていこう。」

こういいながら、おじさんは小道をまがりました。

暗い沖おきの方にかすかに見えていた火が、だんだんこちらへ近づいてきます。そのうち、ぼんぼんと発動機の音も聞こえるようになりました。これは、夜、りょうをして、朝早く漁港に帰る船です。このようにりょうしさんたちは、夜中にりょうにでることが多いのです。



水あげ場についたときには、もう、りょうから帰った船が十なんぞうもつないであつて、りょうしさんたちは、げんきのいい声で話しあいながら水あげをはじめていました。

「ほう、水あげがはじまっているね。ごらん、そちらの船で、あじをあげているよ。」

おじさんのゆびさす方を見ると、きれいな色をしたあじを、船の底から網ですくっては船の上にだしています。船の上にだされたあじは、げんきよくぴんぴんはねています。それを、ほかのりょうしさんがとてもじょうずにつかんでは、はこにいれてしまします。「おじさん、向こうの船では、ずいぶん大きなたいをあげていますね。あのたいは、どれくらいの重さがあるでしょう。」

花子さんは、やはり船の底からあげられているげんきのいい大きなたいをゆびさしながらいいました。

「そうだね。けさのたいは、ずいぶん大きいようだね。一貫くらいはあるだろう。あちらの船には、いろいろな小魚があるようだから、いって見よう。」

おじさんといっしょに、ほかの船の方へいってみると、さめの小さいのやえび・かにふぐなどが、つきつきと水あげされてはこにつめられていました。

花子さんは、こうして水あげされたたくさんの魚は、どこでどんなにしてとられるのだろうかと思つて、おじさんにたずねました。

おじさんは、

「そうだね。——魚をとるには、いろいろな方法があるんだよ。それに漁場といつても、ずいぶんひろく分布しているわけだから、ここでくわしく話すことはできないね。まあ、こんばん、ゆっくり話すことにして、水あげもだいたい終つたようだから帰るところにしよう。」

といいながら、さきにたつて歩きだしました。

(二) めぐまれた漁場

花子さんは、おじさんやおばさんたちと楽しい夕飯をすませました。

おかあさんは、茶の間でおばさんとにぎやかに話しています。花子さんは、ざしきで
おじさんといろいろ話をしています。

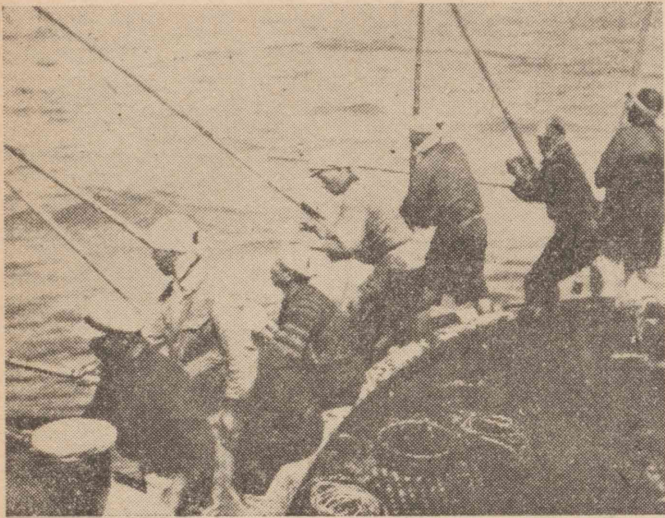
かつお船とトロール船

花子さんは、

「おじさん、けさ見たような魚は、このふきんの海でとれるのですかと、たずねました。」

すると、おじさんは、

「そうだよ。この瀬戸内海には、たくさん川の川が流れこんでいるので魚のえさも多し、それに島がたくさんあるので、魚のすみよい場所になるのだね。」
と、話してくれました。



かつおの一本づり

がね、これをとるには、五十トンから二百五十トンくらいまでの発動機船で、漁場に乗りだしていくのだ。そうして、漁場をみつけると船をとめて、まずえさをまくのだよ。それからなん十人という乗組員が、大きなさおではりをいれるのだね。すると、かつおはわれがちにと水面に突進してきて、これを口にするから、おもしろいようにつれるのだよ。

つりがいよいよさかんになると、そのうちのじょうずな人たちは、小魚にまねたぎ針でつりはじめるのだが、かつおは、生きえとぎ針のみさかきもなくとびついてくるわけだね。とにかく、五十センチメートルから一米ートルもあるようなかつおが、おどりが

「日本は海にかこまれているので、どこの沿岸でも魚がとれるのでしょ。」

「そうそう。どこの沿岸でも漁業が行われているよ。むかしから小さな漁船を乗りだしてさかんに活動してきたものだ。ところが、いまでは漁船も発達しているし、網にも改良が加えられているので、ずっと遠い沖合にまで乗りだして魚をとっているのだよ。」

花子さんは、こんな話を聞いていくうちに、三年生や四年生のとき、むかしの人たちの生活について調べたことを思い出しました。

「そんな沖合では、どんなにして魚をとるのですか。」

花子さんは、またたずねました。

「それには、いろいろな方法があるのだよ。はりでつったり、網でとつたりするね。そのなかでも、いちばん勇ましいのは、かつおの一本づりとトロール船の引き網だろうよ。」

「おじさん、かつおつりはそんなに勇ましいのですか。」

「そうだよ。かつおは、日本列島の東を南から北に流れている黒潮におよんでいるのだよ。」

らつぎつぎとつりあげられるのだから、じつに勇ましいね。」

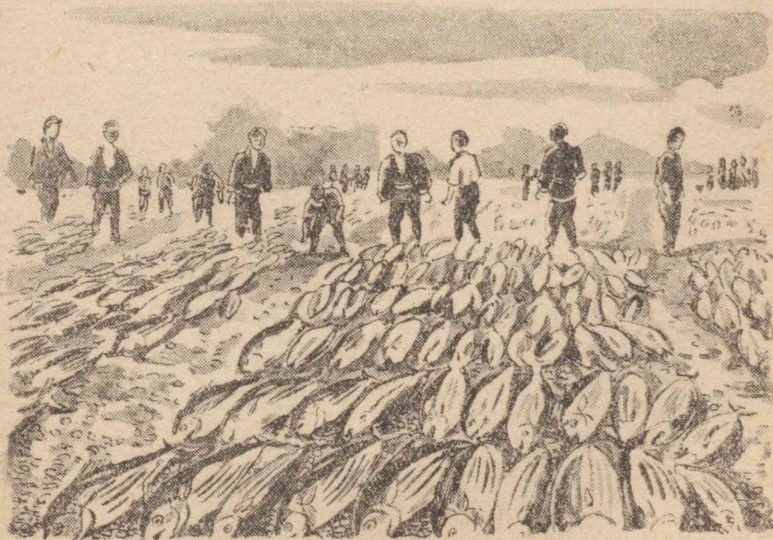
おじさんは、おもしろく話してくれます。

花子さんが、

「そんなにたくさんつれたかつおは、どうしまつするのですか。」

というと、おじさんは、

「かつおのしまつかね。かつお船の底には、冷凍室れいとうしつがあるのでそこへしまつしておくのだよ。これを終ると、またつぎの漁場をさがして船をすすめるわけだね。三週間もの航海を続けると、五、六万びきのかつおを持ち帰ることもあるということだ。」



かつおの大漁

「おじさん、五、六万びきもとれるのですか。」

花子さんは、目をまるくしていいました。

花子さんは、めずらしいかつお船のことを聞いてたいへんうれしそうです。

しばらくして花子さんは、

「さっきのトロール船というのは、どんな船のですか。」と、話しかけました。

「トロール船かね。これはふくろのようになった網を船で引っぱって魚をとるのだよ。もともと、この漁法はオランダで発明されたものだが、じつさいに広くおこなわれたのは、イギリスだね。日本でも、明治時代の末、今から四十年前ごろにこの方法とりに入れたのだが、そのいろいろな改良して、さかんに用いているのだよ。」

この船には、三百トンくらいから一千トンもの大きなものがあつて、一万海里こもの航こう続ぞく力りきをもっているのがあるよ。わりあいに深いところにすんでいるたい・かれい・ぐち・ひらめ・はもなどがとれるようだ。引き網にかかった魚は、かんばんにとりあげ

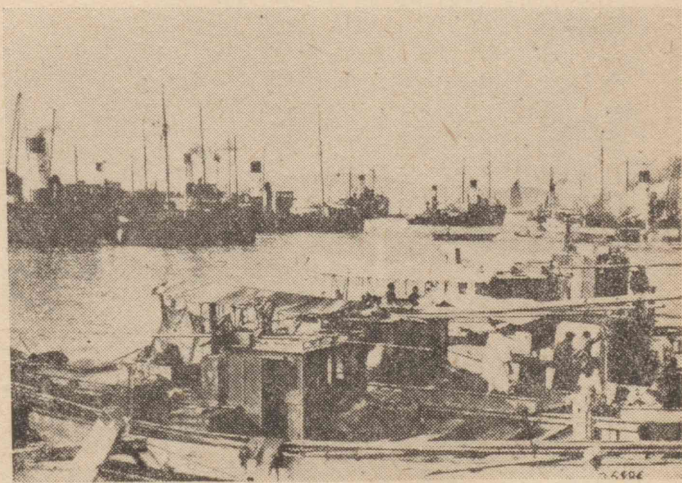
ては冷蔵庫れいぞうこにおさめてしまうので、なんども網を流すことができるわけだね。」

おじさんは、よくわかるように話してくれま
す。

「そんなトロール船は、どの方面の海へでかけるのですか。」

「そうだね。ずいぶん遠い海へもかけているのだよ。なかでも東シナ海は有名だね。そして、その根拠地こんきよちは、山口県の下関しもつけ・宮城県みやぎの石巻いしのまき・北海道の小樽おたるなどだね。まあ、トロール船は、遠洋漁業えんやうりょくの花形はながたといえるだろうよ。」

聞いていた花子さんは、きゆうに思いましたように、「おじさん、町の海岸に地引網がほしてありましたが、あれは近くの海で使うのですか。」



トロール船



地引網

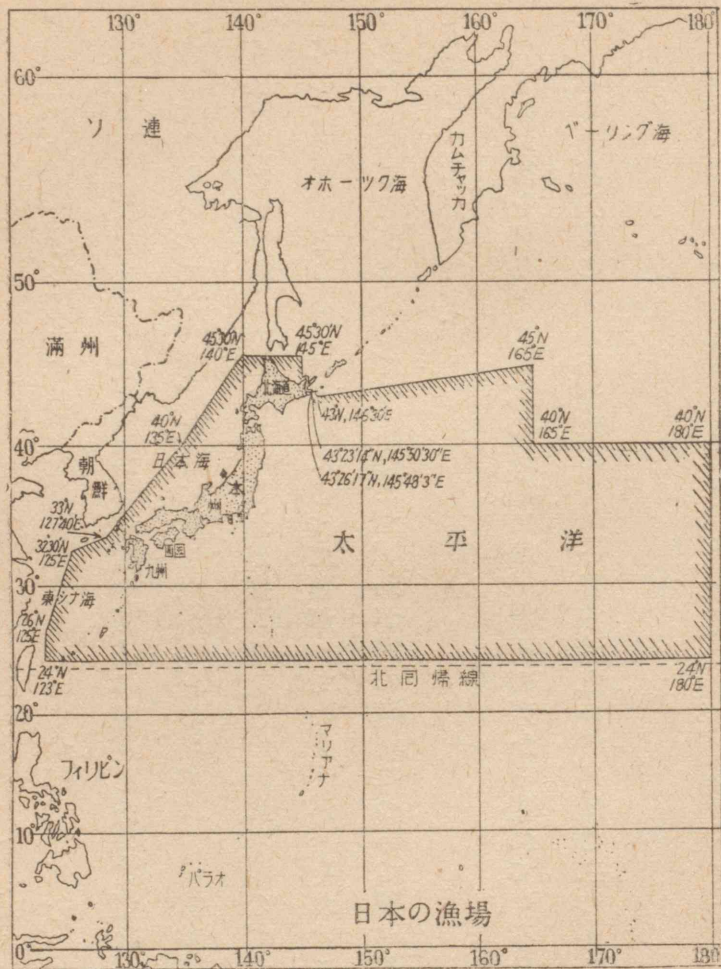
と、たずねました。

すると、おじさんは、

「この町では、地引網をたくさん使っているね。あれは、海岸近くの浅いところにいる魚をとりまいて、海岸へ引きよせるのだが、このほかにも、きんちやく網きんちやくあみというものも使っているよ。」

と、いいました。

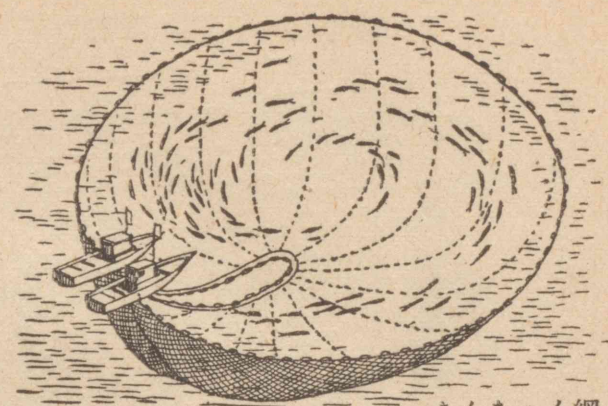
「きんちやく網きんちやくあみというのは、どんな網ですか。」
「おもにいわしなどをとるのだがね。いわしの群むれを見つけると、すばやくこの長い網でとりまいて、そのあとから網の下部にあるひもを引きしめるのだよ。すると、大きな網のふくろになるわけだね。そうして、四方の船から網を引きあげて魚をとるのだよ。」



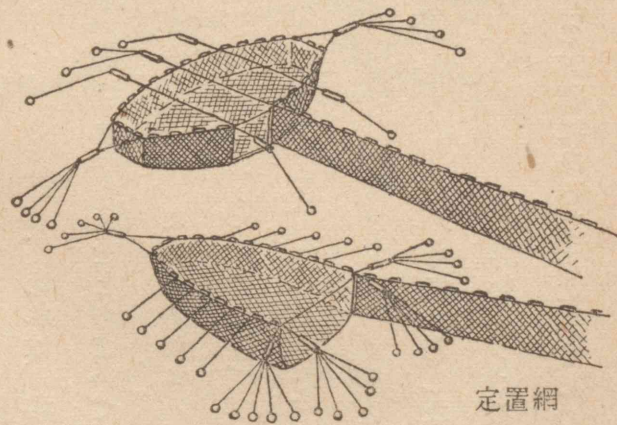
めぐまれた漁場

わが国はよい漁場にめぐまれているので、むかしから漁業がさかんに行われてきました。しかし、漁業は広い海で行われるのですから、そのとり方も種類もいろいろあります。かい類やいわしなどは沿岸でとら

さんにたずねました。つぎの「めぐまれた漁場」は、これをまとめたものです。



さんちやく網



定置網

おじさんのこの話を聞いた花子さんは、魚をとる網にもいろいろな種類があることがわかってきました。

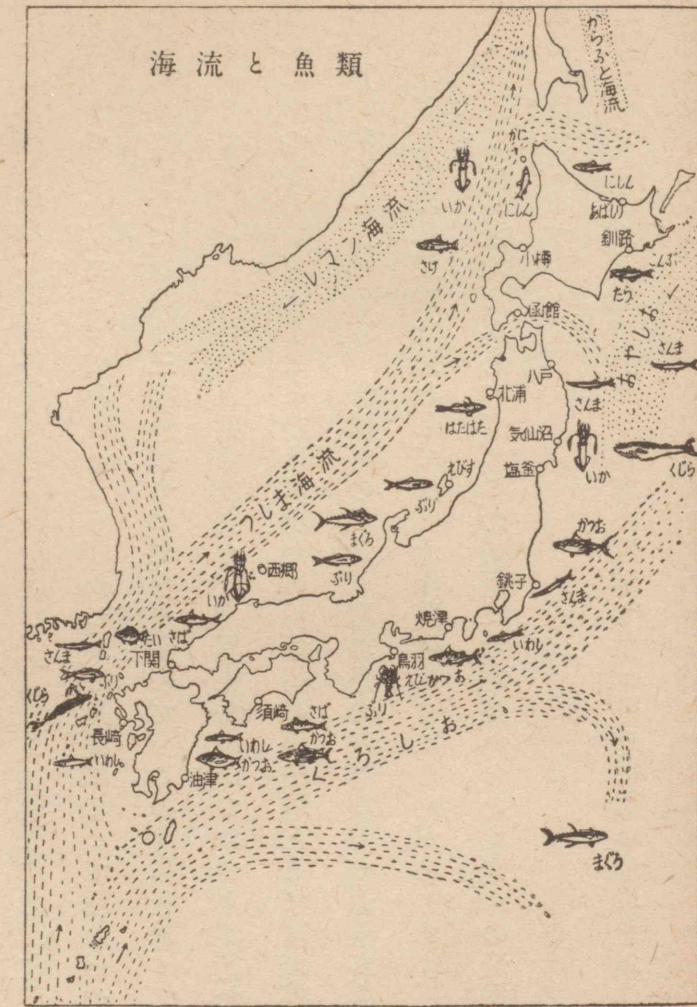
漁業についていろいろのことを知った花子さんは、おもしろくなってきたので、こんどは、日本近海の漁場についておじ

れ、たい・さば・あじなどは沖合でとられるのが多いのです。沿岸で行われるのを沿岸漁業といい、沖合で行われるのを沖合漁業といいます。これをいっしょにして、近海漁業ともいっています。ところが、漁船や漁法の発達した今日では、遠い海洋にまで乗りだして魚をとっています。さきに話したかつおの漁業、トロール漁業や、南極洋にかつやくする捕鯨業などがこれで、これが遠洋漁業といわれるものです。

このように、とれる魚は漁場によつてちがっていますが、それはことに海流のえいきょうによることが多いのです。そこで、わが国の漁場について調べるには、海流について知ることが必要です。

つぎの地図を見ると、日本の近海には、南西の方から流れてくる日本海流という暖流と、北の千島列島の方から流れてくる千島海流という寒流の二つがあることがわかります。

これをも少しくわしく調べると、日本海流は赤道の北方におこり、フィリッピン諸島、台湾の東方をとつて、日本列島の東を北流し、奥羽地方の東方で方向を東にかえてい



ます。また、この海流からわかれた対馬海流もありま

す。この日本海流は、こ

いあ

い色をして

いるので黒潮ともよばれ、

かつおやまぐろやぶりなど

のよい漁場になっているのです。

千島海流は親潮ともいわれていて、千島列島の南を南下して北海道の南をとり、奥羽

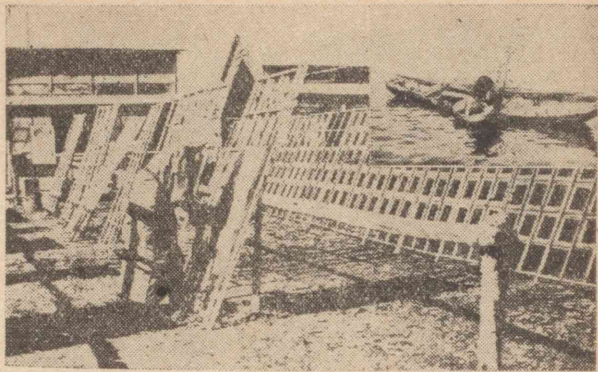
地方の三陸沖にいたっています。また、オホーツク海には樺太海流が南に流れています。これらの寒流には魚のえさが多いので、たら・にしんなどのよい漁場となっています。ところが、おなじ海流にすむ魚でも、とれるのはまた時期によってもちがっています。いま、かつおを例にとってみましょう。かつおは黒潮にのって南からやってきます。春は台湾沖に、秋になると三陸沖にやってきますので、この魚群をおって漁船は北へ進んでいくのです。そしてさつき話したような、勇ましいかつおつりが行われるのです。こうしてかつおやまぐろをとるために出かける漁船の根拠地として宮崎県の油津、高知県の室戸、和歌山県の串本、静岡県の焼津、宮城県の石巻などの漁港が発達しています。おなじように季節的な魚としては、北海道西岸のにしんがあります。そのための漁港として寿都や留萌などがあつて、この時期には本州からたくさん漁民がにしんをとるために出かけます。

こうして、寒暖両流の流れる日本の近海では、各地によい漁場をみますが、いまあげたほかに、長崎県の五島沖や隠岐の島のいか、九十九里浜のいわし、瀬戸内海のたい

などは有名なものです。

また、このような魚のとれる地方では、魚の加工も行われていて、北海道のかずのこ、五島や隠岐のすめ、土佐や駿河のかつおぶし、北海道のこんぶなどはよく知られています。

それに遠浅の海岸や、川口近くの海などではかい類やのりの養殖もよく行われています。有明海のはまぐり、東京湾ののり、英虞湾（三重県）のしんじゆ、広島湾や仙台湾のかきの養殖などがそれです。



あさくさのり

(三) 塩田の見学

花子さんの学級では、となり村の塩田を見学に行きました。

塩業組合えんぎあひの事務所の前で待っていると、先生は、事務所の人と出ていらつしゃいました。

「このかたが、きょうあんないしてくださる吉田さんですよ。」
と、先生がおつしゃつたので、みんなはあいさつをしました。

すると、吉田さんは、にこにこしながら、

「みなさん、よくいらつしゃいました。では、さっそく塩田へあんないしましょう。」
と、いいました。

吉田さんについて、みんなは塩田にむかいました。土手の道を海岸の方へいくと、右手に塩田が見えはじめました。男の人や女の人が、いそがしそうにはたらいています。はじめて塩田を見た花子さんたちは、思わず、

「まあ、きれい。」

「ずいぶん広いのね。」

と、口々にいいました。

これを聞いた吉田さんは

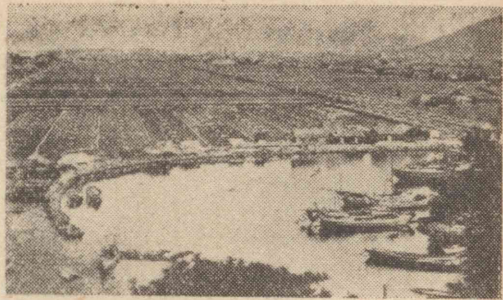
「きれいでしょう。あとでいっしょに、あの塩田へもあんないしますがね。でもじゅんじよ

として、初めに海水だめのところ
ろにいつてみましょう。」

と、いいながら、とり入れ口の方へ歩いていきました。

「ここが海水だめですよ。ここに海水をとり入れて、あの塩田に流しこむのです。そのために、この海水だめは、塩田よりも高いところにつくつてあるわけですよ。」

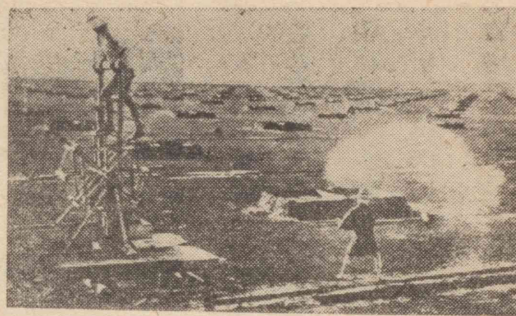
吉田さんがこう話すと、みち子さんが、



広い塩田



塩田の作業 (その一)



塩田の作業 (その二)

「でも、この海水だめに、低い海面からどうして海水を入れるのですか。」

と、たずねました。

「ちょうどいまは、干潮なので、このように海面が低くなって
いるのですが、満潮になると、海面が高くなりますから、こ
の海水だめに海水がはいってくる
のです。ところが、満潮のときでも

塩田が海面より高いところでは、

機械の方で、たえず海水を塩田に入れなければならないわけ
ですね。石川県や鹿児島県には、このような塩田もあります。」

「すると、この海水は、あの管で塩田に流されるのですね。」

進くんがいますと、

「そうですよ。このせんをゆるめると、海水が塩田のあいだの



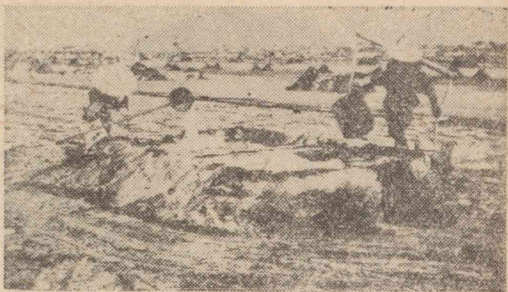
塩田の作業 (その三)

はまみぞに流れていくのです。では塩田の中にはいつてみま
しょう。」

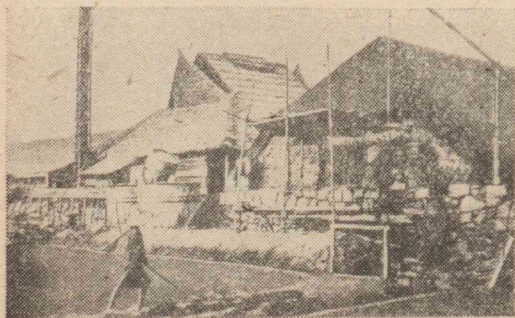
吉田さんは、こういいながら、先にたつて塩田の方にいきま
した。

砂のまかれた塩田の表面は、きれいにならされています。み
んなが、あちらこちらを見ながら歩
いていると、吉田さんが、

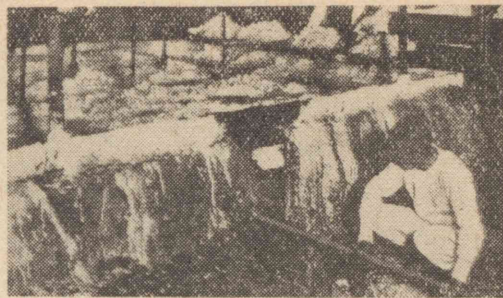
「この砂は、さんしゃというのです
が、この砂の下には、はり土といってねん土が五センチぐら
いのおつみにはっています。そうして、その下には、また砂が
しいてあるのです。はまみぞの海水へは、下にある砂をお
して、塩田のすみまでしみこんでいきます。それから毛細管
現象で、はり土のすきまをとって、塩田の表面に出るわけ



塩田の作業 (その四)



釜屋



塩をたく釜

です。表面に出た海水は天日と風とのため、水分が蒸発し、塩分はこのさんしゃにつくのです。ところが、下からしみ上ってくる海水ばかりではじゅうぶんでないので、上からも大きなひしゃくで、はまみぞの水をときどきふりかけるのですよ。ほら、右手の方を見てごらん。」

と、いいました。
みんなが、その方を見ると、数人の男の人が、大きなひしゃくで海水を

ぎわよくふりかけています。その横では、大きな熊手で、砂をならしている人もあります。

そのとき、登くんがたずねました。

「どうして、あんなに砂をならすのですか。」

「かわきをはやめるために、あのようになんどもなんどもなら



塩の荷造り

すのですよ。こうした仕事を三日ほどつづけると、さんしゃにはかなり塩分がつきますからね。このさんしゃを、大きなくわで沼井ぬいのまわりに集めるのです。では沼井はどんなになつて見えるか見てみましょう。」

みんなは、吉田さんのあとについていきました。

沼井は、四角なますになつていて、その中にも砂がいっぱいはいっていました。

吉田さんは、ますの中の砂をかきわけながら話しました。

「沼井の底は、ほら、こんなに、コンクリートのさんになつていますので。塩分のついたさんしゃを、この沼井の中に入れて、はまみぞの海水を上からかけると、さんしゃについている塩分がとけて、沼井の底にたまります。こうしてたまつた塩分の多い海水を、管で、向こうの土手の上にあるかま屋のタンクへみちびくのですよ。」

塩田をでた花子さんたちは、かま屋の中にはいりました。中は、むつとした暑さで、みんなの顔があせばんできます。深さが三十センチぐらいの四角な鉄のかまの中に、茶色の塩水がぐらぐらにえかえっています。吉田さんは、かまをさしながら説明をつづけ

ました。

「さっきの塩分のこい海水を、このかまにいれ、石炭などをたいてにるのです。こうしてにているうちに、かまの底にどろどろの塩がでてくるのです。この塩をすくいだしてズックのふくろに入れ、そこにある遠心分離器えんしんぶんりきにかけるのです」。

こういった吉田さんは、長いえのひしゃくで、どろどろの塩をズックのふくろに入れました。それをゆかの中にほつてある直径七十センチぐらいのまるいあなの中の遠心分離器えんしんぶんりきにかけました。

しばらくして、遠心分離器をとめた吉田さんは、

「さあ、ごらん下さい。中にはまっ白な塩ができていますでしょう。こうしてできあがった塩は、この地方の専売公社せんばいこうしゃにおさめられて、その後、みなさんの家庭へ配給されるのですよ。」

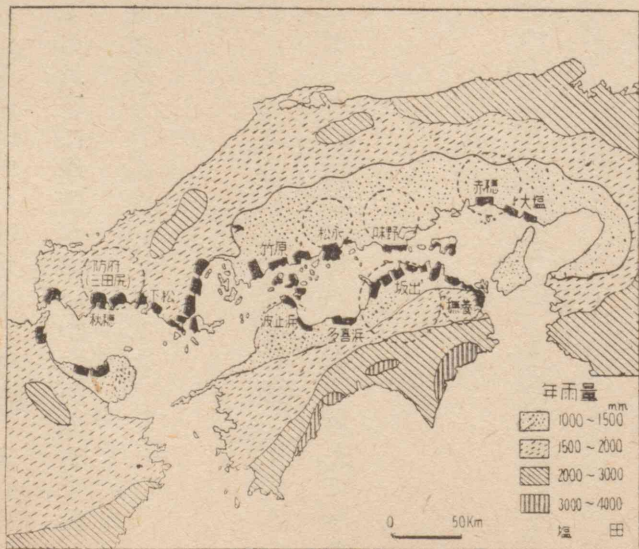
かま屋を見た花子さんたちは、塩のつくられていくようすが、はっきりしてきたようです。

かま屋の外に出ると、吉田さんは、あせをふきながら、また、話しをつづけました。

「さあ、これでひととおり見学は終わりましたよ。ところが、製塩法には、ほかにまだ満州などで行われる天日製塩法があります。

これは太陽の熱と風とで、海水を蒸発させて塩をとるのですね。また、めずらしいのは、ポーランドのウイリツカなどで、石炭をほるように地中からほりだす岩塩というものもあります。ところで、みなさん、わが国の塩の産地はどこか、知っていますか」。

吉田さんが、こうたずねると、進くんが答えました。



瀬戸内海の塩田分布図

「それは瀬戸内海の沿岸でしょう。」

「そうです。くわしくいうと、兵庫県の赤穂、岡山県の味野、香川県の坂出、広島県の松永、山口県の防府などですね。では、なぜこの地方に塩田が多いかわかりますか。みんなは、しばらく考えていましたが、こんどは花子さんがいいました。」

「この地方は、雨が少ないからでしょう。」

「そうです。つまり、快晴の日が多いわけですね。そのため、塩づくりに適しているのです。ではつぎに、こうしてつくられた塩が、どんなに使われているか、考えてみましょう。」

そのとき、すみ子さんが話しました。

塩は、つけものをつけたり、みそやしょうゆをつくるときに使うし、また、魚の塩づけにも使います。」

すると、つづいて登くんが、

石けんをつくるときにも使われるのでしょう。」

と、いいますと、

「よく知っていますね。そのように、塩は食用としてたいせつであるばかりでなく、工業用としてもきわめて重要なものですね。そのほか、人絹・パルプ・ガラスなどをつくるときにも使われるのですから、わたくしたちの生活になくはならないことがわかるでしょう。」

と、吉田さんは話してくれました。

塩田の見学を終わったみんなは、先生といっしょに、吉田さんにお礼をいって、帰途につききました。

学習の手びき

- (一) わが国は、世界でもゆびおりの水産国ですが、一年間にどれくらいの産額があるでしょうか。またそれらの魚類は、どのように消費されているでしょうか。このようなことについて調べて「ごらんなさう」。
- (二) 魚を遠くの地方へ輸送したり、ながく保存ほぞんしたりするためには、いろいろの加工が行われていますね。このような魚の加工について調べてみましょう。
- (三) 魚をとるには、いろいろな方法があります。これらの漁法が、むかしからどのように進んできたかについて調べて、みんなで話しあいましょう。そのとき、漁船についても調べることがたいせつになりますね。
- (四) わが国のおもな漁港の分布図をつかって、その漁港の特色のある水産物について調べましょう。
- (五) わが国には、たくさんのお水産物がとれるほかに、海岸や湖や河川で、魚や貝や海藻の養殖がさかんに行われていますね。こんな地方は、わが国のどこに見られ、またどんな方法で行われているでしょうか。
- (六) 塩は、アルコールなどと同じように専売公社から販売されていますね。この塩は、いろいろな方面に使われていますが、その用途について、くわしく調べて「ごらんなさう」。

四村から町へ

(一) 町への道路

農村や漁村のことについて、いろいろ調べてきた花子さんは、こんどは花子さんの村から町へ送りだしている産物について、つぎのようにまとめました。

この村から町へ送りだしているものでは、なんとといっても米と麦が多くて、それにつぐのが野菜類です。野菜類のなかでも、春作のきゅうりやキャベツ・なす・かぼちゃなどがおもなもので、秋作のものはほんのわずかです。

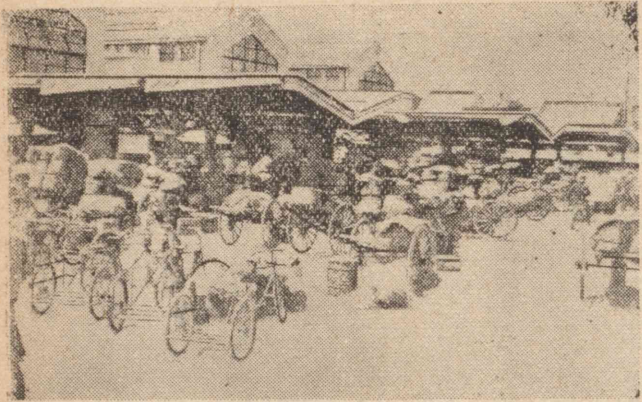
春作の野菜は、田うえがはじまるまでに田や畑でつくるのです。春のはじめに種をまいた野菜は、日照りが強くなるにつれてだんだんと成長しますが、そのあいだには、肥

料をやつたり、害虫をのぞいたりしなければなりません。それで、野菜づくりはたいへんめんどうな仕事なのです。



大都市の近郊の野菜畑

五月の終りごろには、もう、きゅうりやなすの積みだしがはじまります。六月も中ごろになると、野菜の出ざかりになるのですが、ちょうどこのころには田うえもはじまるので、村の人々はたいへんいそがしくなるのです。村では、これらの野菜をみんな農業協同組合へ集めて、町へ送りだします。それで、このころの組合の倉庫の前には、野菜の山がつくられます。にいさんの話では、この村からH市へ送りだした野菜は、この春だけでもトラック十台以上になるだろうとのことでした。



都会の青物市場

H市の近くにあるこの村でも、これだけたくさん野菜を送りだしているのですから、近くにもっと大きな都市をひかえている村々では、町の人々の食卓をにぎわす野菜をたくさんつくっているのだらうと考えました。このことをにいさんに話すと、にいさんは、

「東京や大阪の近くにいくと、一年中野菜ばかりをつくっている農家もあるのだよ。」と話してくれました。ところが、東京のような大都会になると、そのふきんの村から送られる野菜だけではたりないので、遠くの東北地方や南九州の宮崎県などからも送られているということでした。

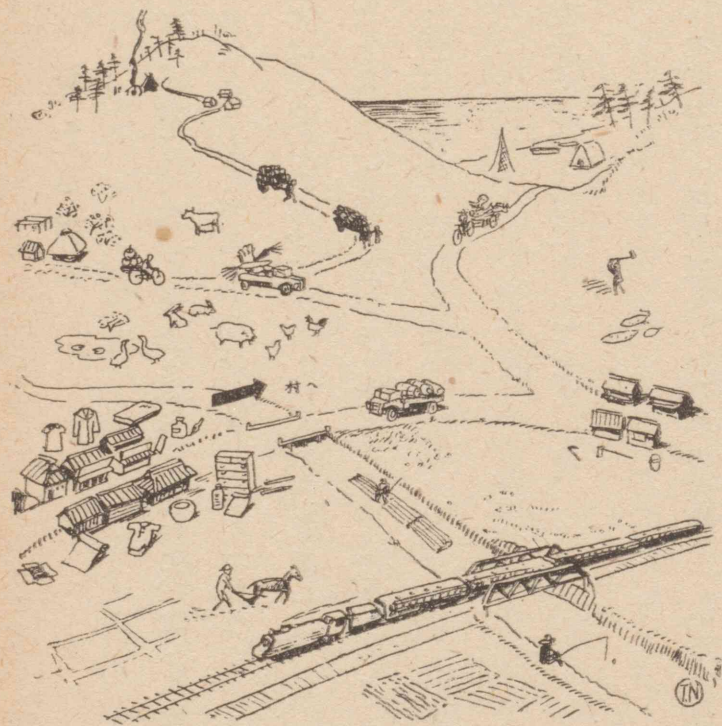
それにしても、こうした野菜や、前に調べたみかんやりんごなどのくだ物を、ずっと遠い地方へ送るためには、速い輸送力^{のせうとせうりき}がともなわなければならないわけです。交通機関の発達しないむかしでは、野菜やくだ物

を遠方に送るなどとは思ってもよらなかったでしょう。ところが、交通機関の発達した今日では、南の地方にできた野菜やくだ物が北の地方へ運ばれ、また北の地方でできた産物が、南の地方へも送りだされることになるわけです。

このようなことは、この村でもいえるようです。おばあさんの話によると、いぜんはこの村をとつてH市に通ずる道路は、道幅もせまく、それにまがりも多くて荷車をおすのにもこまりましたが、バスやトラックがおるようになると、すっかり改修されて、いまのようなりつばな道路になったのだそうです。この道路のおかげで、農業倉庫の前でトラックに積まれた野菜は、三十分ののちには、もうH市の青物市場にとり着し、それから数時間もたたないうちに町の家々の台所に着いていることになるわけです。

ところが、H市への道路は、この村をおるものだけではなくて、東からも西からも大きな道路が通じています。それでH市へは、あちらからもこちらからもいろいろな農産物や林産物などがはいることになります。それに、海にも面していますから、魚類をはじめ、島でとれたくだ物などが、直接運ばれてくるわけです。

このように、いろいろ調べてくると、村から町に通ずる道路や海上の航路は、町の家々の台所に通ずる動脈だといえるようです。



村から町へ

(二) 町から村へ

ここまで調べてきた花子さんは、こんどははんたいに、町から村にはいるものには、どんなものがあるだろうかと考えました。身のまわりのものについて考えてみると、村でつくられたものは、たいへん少ないことに気がつきました。

花子さんが、こんなことを思いながら、町からきているものをノートに書きこんでいると、となりのへやで仕事をしていたにいさんが、

「花子、なにをしているのかね。」

と、いいながら花子さんのそばにやってきました。

花子さんは、

「にいさん、さつきから町へ送りだしている村の産物を、いろいろ調べたのですが、こんどは、町から村へどんなものがきているだろうかということについて、調べているのです。」

と、いいました。

「ほおう、それはいい勉強だね。町から村へきているものは、ずいぶん多いだろう。」

「ええ、とても多いですよ。この洋服だって、この本だってみんなそうですもの。」

花子さんは、自分の洋服や本をゆびさしながらこういいました。
すると、にいさんは、

「でもね、ずつといぜんは、この村の人たちの着物地は、女の人のはたおり機で織ったそうだし、村で使うくわやかまなどの農器具も、村のかじ屋さんでつくっていたのだよ。火の見やぐらのところの竹田さんの家は、いまは仕事をしていないが、やはり、かじ屋さんといっているだろう。そのころの店の名が残っているわけだね。」

と、話しました。

この話を聞いた花子さんは、いぜん村の家々ではたを織ったり、かじさんがつちをふるってかまをつくったり、くわの修理をしたりしていたころの村は、どんなようすだったのだろうかと思いました。

そんなことを考えていた花子さんは、またにいさんにたずねました。

「にいさん、村田さんのお店では、どこから品物を仕入れてくるのですか。」
すると、にいさんは、

「雑貨屋ざっかやの村田さんかね。村田さんは町の問屋とんやにいつて仕入れるのだよ。」
と、いいました。

「問屋というのは、どんな店ですか。」

「そうだねー、町には、紙や金物かなもののようなものを大量にあつかっている大きな店があるだろう。あれが問屋だよ。問屋では、工場こうじょうでつくられた品物を大量に仕入れておいて、それをその地方の小売店へ売りさばくのだが、まあ、仲継店なかつぎと思えばいいだろう。工場こうじょうでつくられた品物を、一々地方の小売店へ送るのは、たいへんめんどうなことだからね。」

花子さんは、店にもいろいろな仕組みがあるものだなと思いました。

「では、村の組合の店にある農器具や肥料なども、やはり、問屋から仕入れるのですか。」

花子さんが、またたずねました。

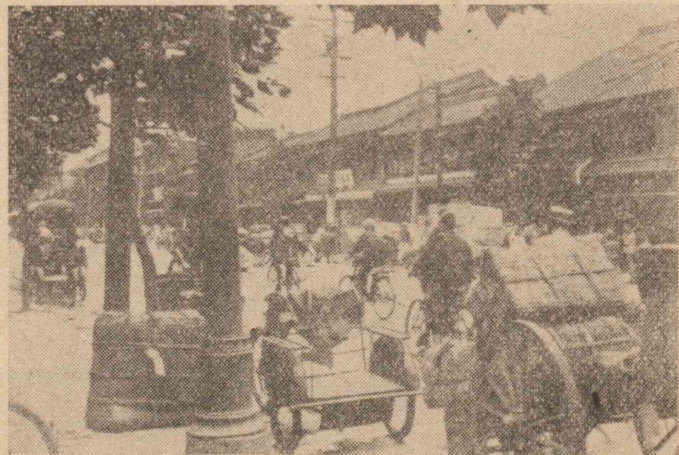
すると、にいさんはうなずきながら、

「いいところに気がついたね。ところが、村の組合の品物は、直接工場から仕入れているのだから、村田さんの店とはちがうわけだね。」

と、いいました。

「工場から直接仕入れるって、どんなにして仕入れるのですか。」

「それはね、工場では、その工場で作った品物の売りさばきをいろいろ考えているのだよ。たとえば、見本を村々の組合へ送ったり、工場の人を直接地方の組合へまわらせて、注文ちゅうもんをとっているのだね。だから、組合ではこうした注文に必ずばいなのだ。こうして、各地からの注文が集まると、工場では同じ

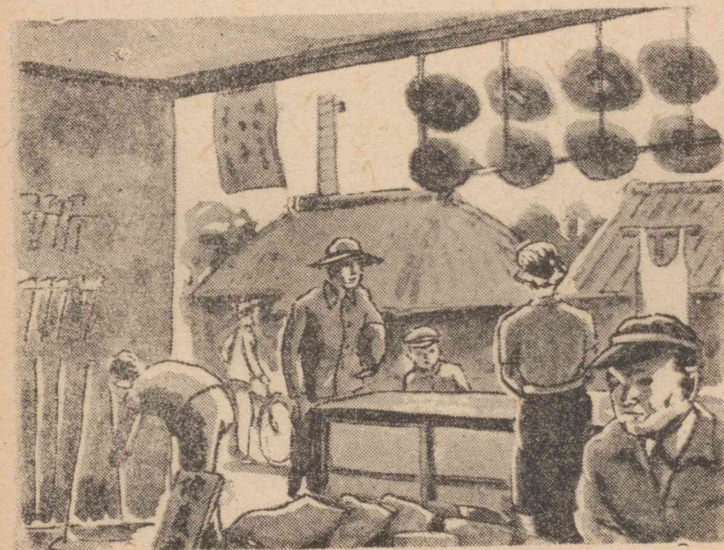


問屋町

地方の分をまとめて、その地方の駅へ発送するわけだ。この駅には、また工場の人が出張していて、それぞれの組合へ送る手配をしている。この村の組合にも、いろいろな工場の見本もきているし、出張員もやってくるよ。」

「それでは、組合では、工場に注文するだけでよいのですか。」

「いやいや、注文するといっても、品物をえらぶのがなかなかだよ。ことに農器具や肥料や種物などは、村の田畑に適するものと適しないものがあるからね。こうしたことをみきわめたり、ねだんをくらべたりして、どれにするかを決めることがたいせつなのだよ。」



組合の店頭

「にいさん、そうすると、組合はいい品物を集めているわけですね。」

「まあそうだね。これは、ふつうの店でも同じことだよ。お客さんによるこんで買ってもらうためには、いい品物を売らないといけないだろう。それで、どの店も品定めをすることになるわけだね。そこで工場も、できるだけいい品物を安く生産するために、いろいろくふうしているのだよ。」

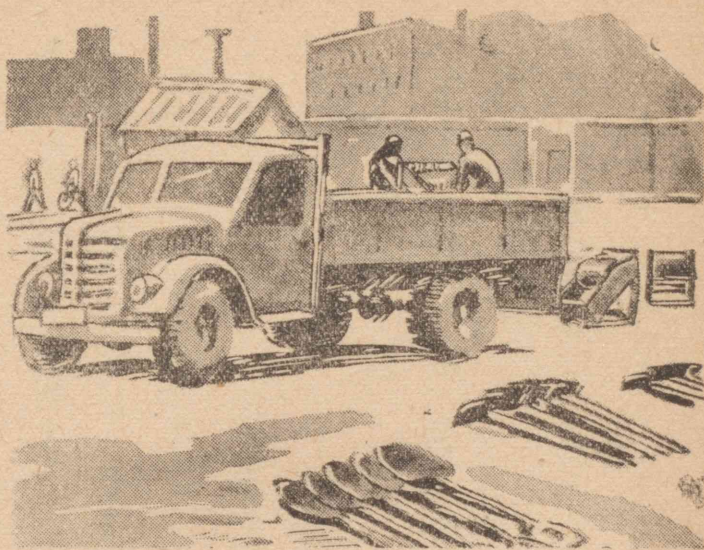
この話を聞いた花子さんは、品物がどんなにして改良されていくかが少しわかっってきたようです。

しばらくして花子さんは、

「それでは、この村にはいつてくる農器具や肥料は、H市の工場で作られたものだけではないのですね。」

と、話しかけました。

「そうだ。H市の工場で作られたものもあるが、やはり、阪神地方や名古屋地方の工場で作られたものが多いようだね。これらの地方の大きな工場では、いろいろの品



物を大量に生産して、各地へ送りだしているのだよ。いまのように輸送の便がよいと、ずいぶんはなれていても、よい品物さえつくれば各地からの注文に応じて、品物を送れるわけだ。

それに鉄道の通じていない村でも、村の近くの駅までとどければ、あとはトラックや荷馬車でらくに運ぶことができるからね。

ここまで話を聞いた花子さんは、交通の発達によつて遠くはなれている村と町も、結ばれていることがはっきりわかってきたようです。にいさんは、続いて話しました。

「どうだね花子。村から町へもいろいろな品物を送りだしているが、町から村にきてい

るものは、もつと多いことがわかっただろう。こんなに村と町とは、深い関係があるのだよ。それに、この村のように都会の近くにある村は、いろいろつごうのよいことがあるからね。たとえば、村では、めつたに聞かれない音楽会や講演会なども、町にいけば聞くことができるからね。」

「一学期の終りごろにも、みんなて博覧会を見にいきましたよ。」

「そうだったね。あのときは、この村からもたくさんの人が、でかけたようだね。村の人も、こうした機会を活用することがたいせつだよ。」

花子さんは、にいさんの話を聞いて、村と町との関係が、いよいよ、はっきりしてきました。

学習の手びき

- (一) 村の産物は、それぞれの地方によってちがっていますね。それらのなかには、ほかの地方ではつくられない特産物とくさんぶつもあります。どんな特産物が、どんな地方につくられているかについて調べてごらんなさり。
- (二) 村から町へ通ずる道路や交通機関がどのようにかわってきたか、そのためどんなに便利になってきたかについてくわしく調べてごらんなさり。
- (三) 村から町へも、町から村へもたくさんの品物がいききしていますね。わたくしたちの村について、いききしているおもな産物や輸送経路けいじろなどくわしく調べてまとめてごらんなさり。
- (四) 江戸時代の商業や工業のようすについて、歴史の本などを読んで、いろいろ調べてごらんごらんなさり。
- (五) 都会にも村にも、いい点とわるい点とがあるようです。それぞれについてくわしく調べ、みんな話しあってごらんごらんなさり。

五 都会の人たち

(一) みち子からの手紙

花子さんが学校から帰ると、東京へ転校てんこうしたみち子さんからやくそくの手紙がきていました。花子さんが、大よろこびであけてみると、手紙といっしょに東京の写真がいろいろはいつていました。手紙には、つぎのように書いてありました。

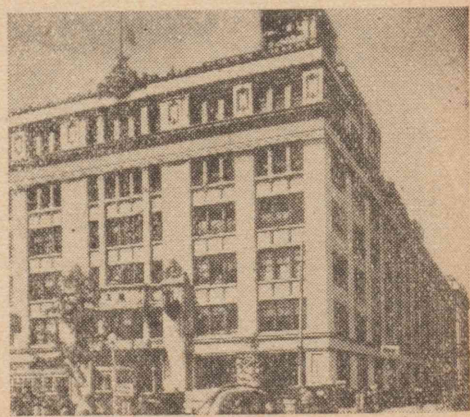
花子さん、お手紙ありがとう。よし子さんもはる子さんも、お元気とのことでした。いへんうれしく思いました。いつも、なつかしいみなさんのことを思いだしています。わたくしも元気で勉強にはげんでいます。もう、学校にもなれてお友だちもたくさんできました。

お手紙によると、東京のにぎやかな町のようすを知らせてほしいとありましたので、この前の日曜日におかあさんといっしょに、銀座に出たときのようなすをお知らせしましょう。

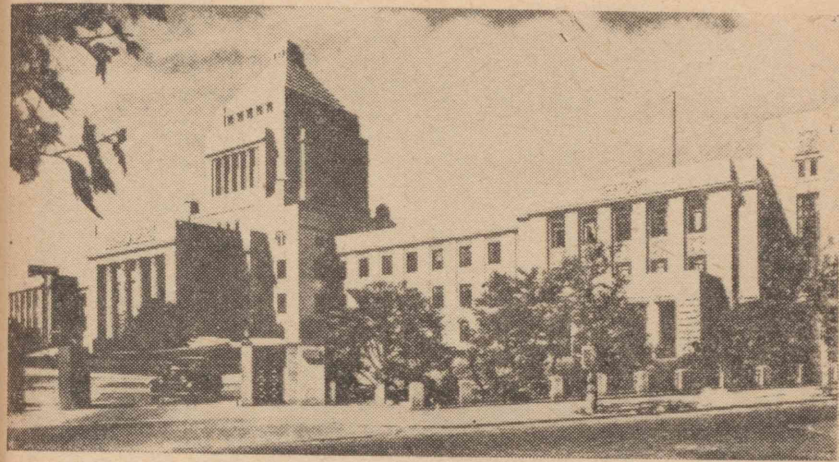


銀座に出て、いちばんびつくりしたのは、人出の多いことでした。電車や自動車がさかんにいききしている通りの両がわの歩道には、人の波が続いているのです。わたくしたちも、この人の流れにもまれながら進みました。たちならば店頭には、衣服や家具や楽器などが、たくさんかざられていました。また、歩道のわきにも小さい店がならんで、いろいろな品物を売っていました。わたくしたちは、この人の波におされる

ようにして大きなデパートにはいりました。ちょうど有名なパイプオルガンがえんそうされていたので大ぜいの人々が楽しそうに聞いていました。店内には、いろいろな品物が美しくかざられ、ほんとうに明かるい感じがしました。一階からエレベーターに乗って五階に上がりました。ここには、本や文房具・楽器などの売場があつて、黒ぬりのピアノやバイオリンがたくさんならんでいました。



それから、家具を売っている四階や赤ちゃんのうば車やおぼろしなどを売っている三階へもいきましたが、やはりたくさん品物が美しくならんでいて、さすが全国に名を知られているデパートだけあつて大きなものだと思いました。日市のデパートとは、くらべものにならないほど大きなものです。写真で、そのようすをごらんください。



国会議事堂

では、こんどはこれくらいにしておきます。また、お手紙をくださいね。みなさんによろしく。
さよなら

花子さんが、同封の写真を見ていると、おかあさんが、

「うれしそうですね。みち子さんからなんていつてきたの。」

と、いいました。

すると、国会議事堂の写真から目をはなした花子さんが、

「おばさんといっしょに銀座にいったことがくわしく書いてありますよ。」

と、話しました。

「銀座は、たいへんな人出でしょうね。」

「ええ、日曜日だったから、人の波だと書いてあります。東京は区内だけの人口でも、四百六十万もあるの、人出が多いのでしょうね。」

「そうですね。且市も、この地方では大きな都会ですが、なんといつても、東京とはくらべものになりませんからね。」

「おかあさん、東京は、どうしてあんなに大きな都会になったのですか。」

花子さんは、おかあさんの顔を見つめながらたずねました。

「東京は、日本の中心地で商業や工業がさかんですし、それにむかしから栄えた町です。」



明治初年の銀座通り

からね。」

「むかしからそんなに大きな町だったのですか。」

「今から百六十年ぐらい前の人口でも、百三十万くらいもあつたのですからね。」

「そうすると、そのころでも、いまの京都の人口より多かつたのですね。」

「京都は、そのころ四十万くらいだったのですから、京都にくらべると、東京の発達のすばらしかつたことがわかるでしょう。」

おかあさんは、やさしく教えてくれます。

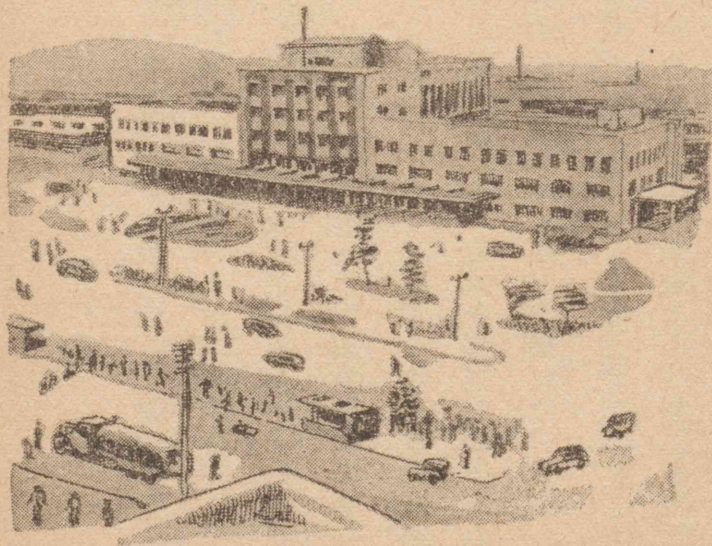
花子さんは、こんな話をしているうちに、にぎやかな都会のようすについて、もつと知りたいと思いました。

(二) にぎやかな都会

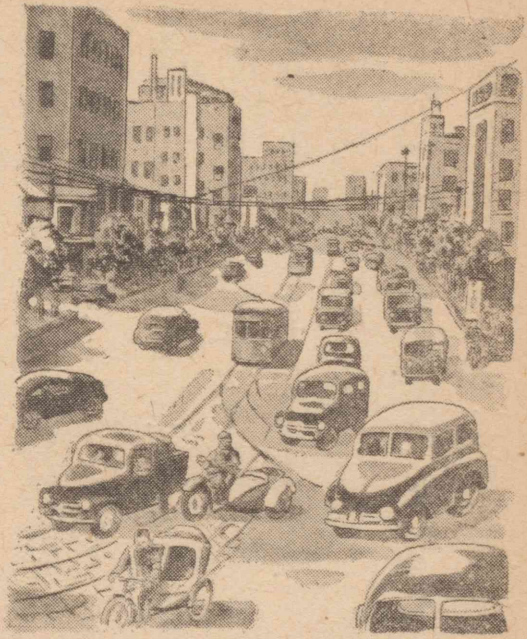
あくる日、花子さんは、学校ではる子さんやよし子さんに、みち子さんからの手紙を見せました。そして、にぎやかな都会について知りたいと思っていることを話すと、ふたりともさんせいしました。そうだんのあと、町の学校に、つとめているはる子さんのにいさんから、話を聞くことにしました。

つぎの話は、これをまとめたものです。

日本でいちばん大きな都市は、なんといつても東京で、つぎは人口百七十万の大阪です。



大阪の玄関



都会の自動車

会社や工場に通勤する人たちがたいへんこんざつします。それに、市街には、大小の家々がたちならび、その間を市内電車やバスやトラックが、ひっきりなしに走っています。こうしたにぎやかな市街をとって都心部にいくと、都市の市政をあつかう市役所をはじめ、銀行や郵便局・電報局・会社などの大きなビルディングがいくつもそびえています。つまり、このふきんは都市の政治や経済の中心部になっているわけです。

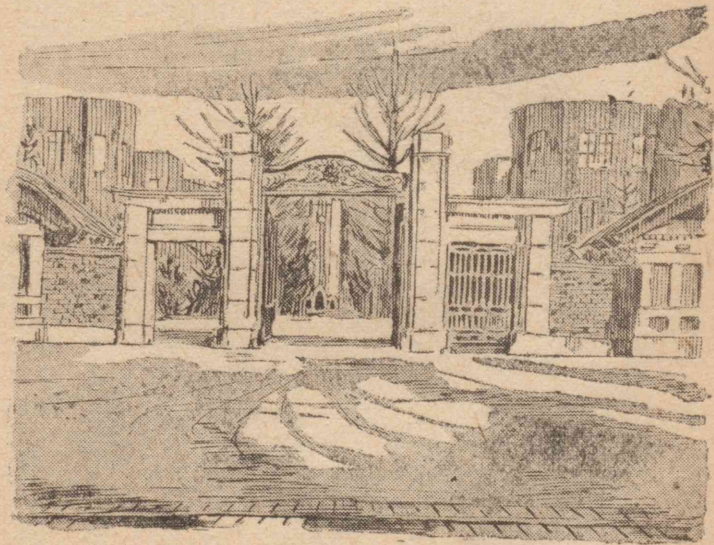
にぎやかな商店街は、これらの都心部の近くにひらけているのがふつうです。にぎやかな商店街で、全国的に有名なものは、東京の銀座通りや大阪の道頓堀、京都の京極通りなどです。この商店街の店頭には、国内で生産された日用品や装飾品が、たくさんならべてあるばかりでなく、外国から輸入された品物もちんれつしてあります。こうしたところからも、世界の国々との貿易のさかんな現代のようすがわかります。

これらの商店街は、近年きゆうに発達してきたものですが、そのなかでもとくちょうのあるのは、大きなビルディングのデパートでしょう。デパートは、一つの建物の中になん百もの売場がならんでいるのですから、たいへん便利なわけです。また、このような新しい商店とともに、むかしからの商店がにぎやかさをみせていることはおもしろいことです。これは、商業には信用がどれほどたいせつであるかということを教えているように思われます。これらのにぎやかな町には、警察署や消防署があつて、その区域の安全をはかっていることはいうまでもありません。

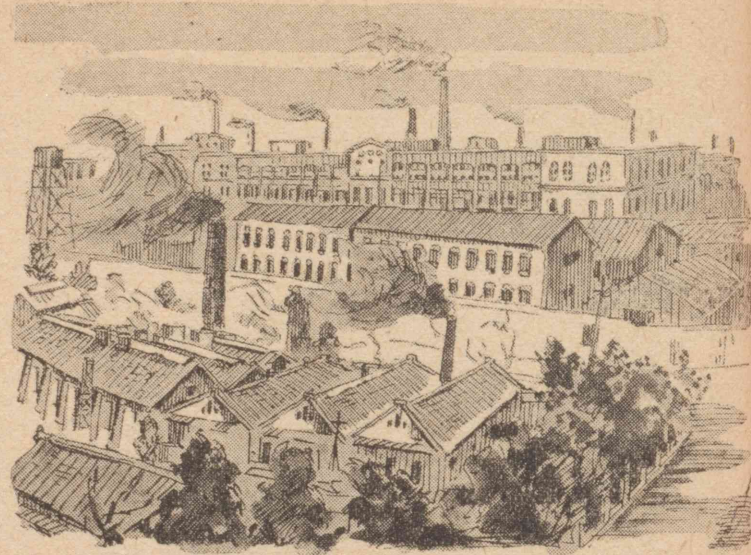
また、少しはなれた静かなところには、大学もあつていろいろな研究が続けられてい

ます。ことに、東京、大阪、京都、名古屋、福岡、仙台などには、大きな大学があります。そのほか、地方の大きな都市にも公立や私立の大学が、たくさん設けられています。そしてこのような静かな地帯には、住宅街がひろがっているのがふつうです。これは、都会でのあわただしい仕事にたずさわる人々の生活を考えれば、とうぜんのことといえましょう。

つぎに、いろいろな品物を生産する近代的な工場は、だいたい都市の周辺しゅうへんに集まっています。東京でも大阪でも、このことがはつきりしているようです。ちよつと考えると、町の周辺に工場を建てると不便でないかと思われませんが、工場には広い土地があるうえに、たてられた工場の機械が、さわがしいひ



東京大学



工場街

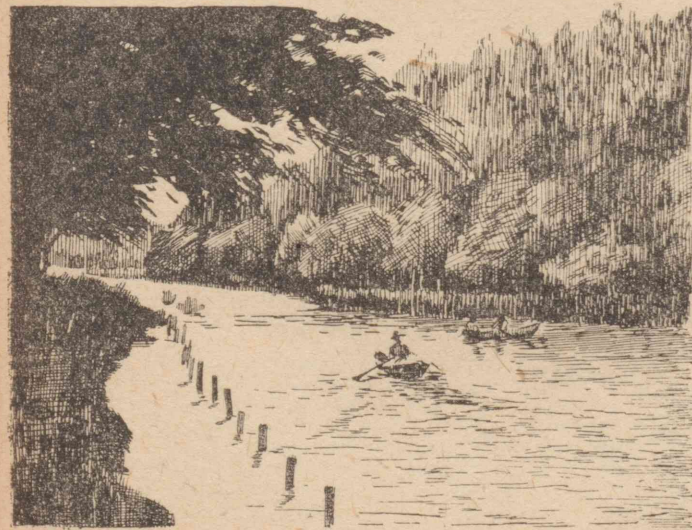
びきをたてたり、ばい煙を出したりするので、都市の周辺に建設されるのです。

このような工場地帯にいくと、都心部や商店街とはすつかりかわったおもむきを見えています。もうもうとあがるけむり、にぎやかな機械の音、荷物を積んでいききするトラックなど、たいへんかっぱつな光景です。

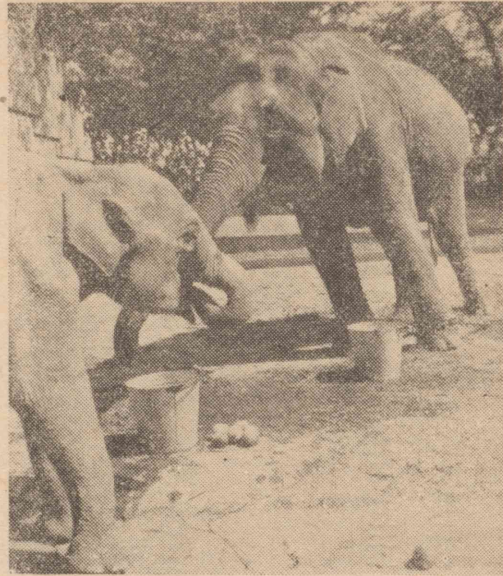
ところで、このように商業や工業のさかな大都市のなん百万、なん十万という人口は、おもにそのふきんの村々や、もつと遠くの地方から集まってきた人たちによってふえたのです。わが国の人口分布は、明治三十年ころに農村に約七十八パーセント、都市に約二十二パーセントになっていましたが、昭和十

五年ころでは、農村に約六十七パーセント、都市が約三十三パーセントにかわつてきました。これによつても、近代都市がここ数十年の間にきゆうに発達したことがわかるでしょう。

ところが、たくさんの人々が集まつた都市には、いろいろな社会問題がともないます。たとえば保健衛生に関する事、職を求め人々にたいする就職あつせんのこと、娯樂施設や犯罪のとりしまりのことなどいろいろな問題があるわけです。こうした問題については、それぞれ病院や治療所を設けたり、職業安定所や自治警察署を置いて安全をはかつています。また、近ごろでは、市民の生活を明るく楽しいものにするため、図書館や公園・動



都市の公園（東京いのかしら）



動物園

物園・子どもたちの遊戯場などもつくられています。これらはみんな市民の力によつてできたものですから、市民はそれぞれのきまりにしたがつて活用することがたいせつなのです。

いまわが国民は、平和な社会を建設しようとしておられるのですが、それぞれの都市でも、これにちよびて新しい計画がすすめられています。なかでも、広島市と長崎市は、平和都市、文化都市としてのいろいろな計画がすすめられています。明かるい住みよい都市を建設して、民主的な市民をそだてていこうとしているのです。

(三) 町についての研究

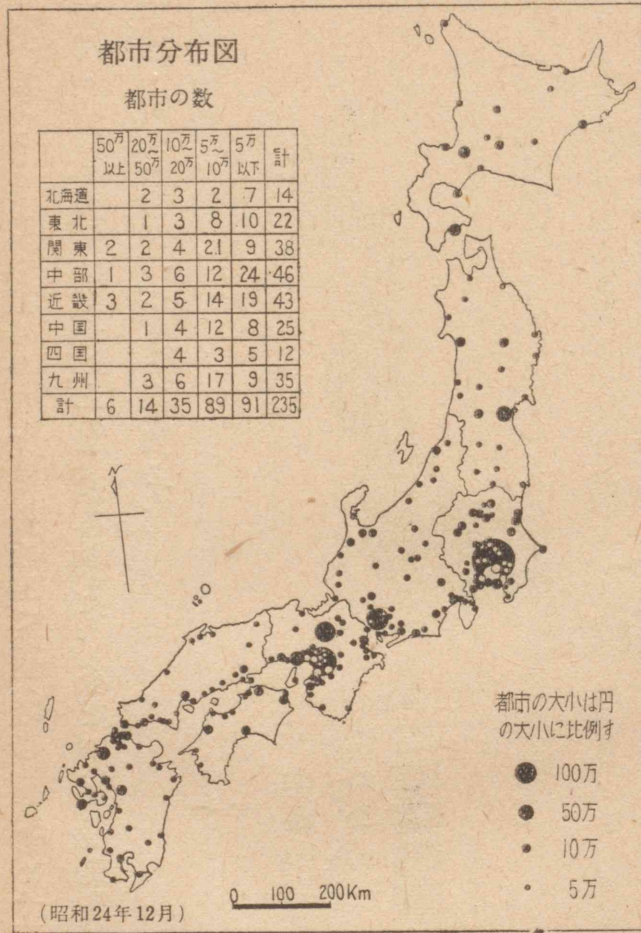
はる子さんのにいさんから、いろいろな話を聞いた花子さんたちは、わが国の都市の分布について調べようと話しあいました。

そこでまず、はる子さんのにいさんからかりた地図を見て、市制のしかれている都市の分布図をつくりました。しかし、その地図には、ごくさいきん市になった都市は、のっていないことに気がついたので、これらの都市は年鑑ねんかんで調べて地図に書き加えました。こうしてできあがった地図を見ると、つぎのようなことがわかりました。

都市の分布

わが国の現在の市の数は、約二百三十です。市制のしかれるのは、だいたい人口三万以上の都市ですが、このなかには東京・大阪・京都・名古屋・横浜・神戸などのような大都市から、人口十万以上の中都市、それに三万近くの小都市がふくまれています。

この地図を見ると、表日本の地方が、裏日本の地方よりたくさんの都市が分布していることがわかります。そのなかでも、とくに多いのは東京を中心とする関東地方、濃尾平野から近畿地方にかけての一带、それに北九州地方です。これらの地方をつなぐ東

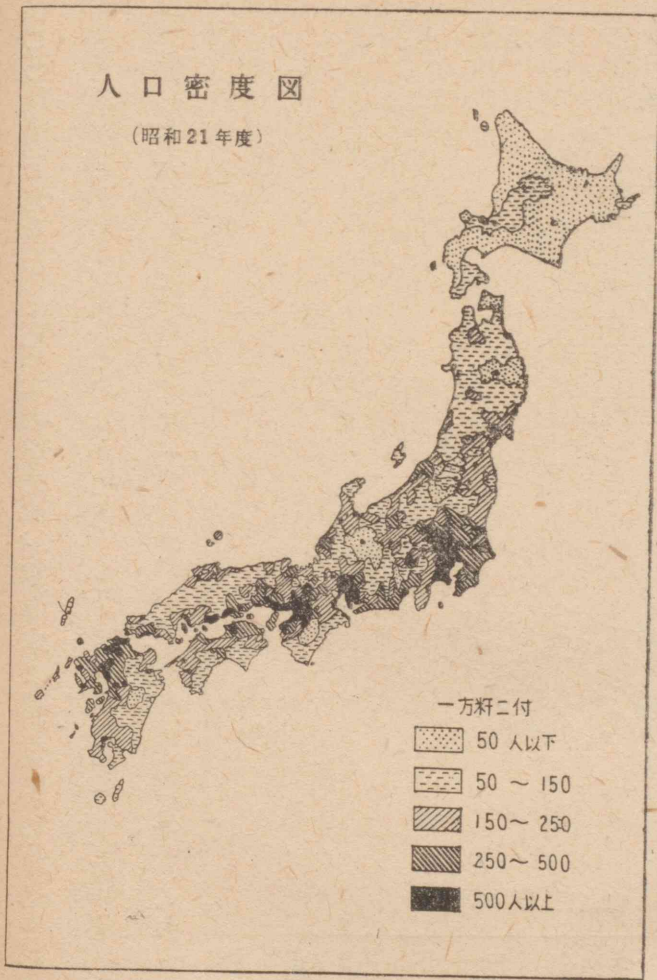


海道本線・山陽本線
鹿児島本線の沿線に
もまたたくさんの都
市が見られます。裏
日本では、山陰本線
や北陸本線などにそ
つて都市が分布して
いますが、その数は
少ないのです。
市の数を府県別に

調べてみると、いちばん多いのは、大阪府で、大阪市をはじめ十五の市があり、ついで福岡・山口の両県にも十以上の市があります。少ないのは山梨県と高知県で、それぞれ甲府・高知の市が一つあるだけです。

人口密度図

(昭和21年度)



こうした都市の分布は人口の分布と関係があるだろうと思つたので、つぎにわが国の人口の分布についても調べました。

この分布図を見ると、人口の

多い地方は、関東平野・濃尾平野・大阪ふきんの平野・筑紫平野・越後平野などの平地、それに各地にある盆地であることがわかりました。この人口分布図と、さっきの都市の分布図をくらべてみてわかったことは、人口の多い平野や盆地には、やはり都市が数多く分布しているということです。そのとき、とくにおもしろいと思つたのは、それぞれ

の盆地には都市が一つか二つ、ほとんど例外なしにあるということです。甲府盆地の甲府・奈良盆地の奈良・米沢盆地の米沢などがこれです。このことから、人口は、平野や盆地に多く、したがって都市もやはり、平野や盆地に多いことがわかりました。

こうした調べをしていくうち、こんどはこれらの都市は、どんなにして開けてきたの

だろうかということが問題になりました。

町のおこり

花子さんたちは、また、はる子さんの家に集まって、町のおこりについていろいろな調べをしています。きょうは、正雄くんもいっしょです。はる子さんのいさんは、火

ばちのそばで新聞を読んでいます。

花子さんが、はる子さんに話しかけました。

「都会は、いつごろからにぎやかになったのでしょらね。」
すると、本を読んでいたはる子さんが、

「やはり、大部分は明治時代からのちに栄えたのでしょらね。この本には、商業や工業がさかんになるにつれて、大きな都市が栄えたと書いてありますよ。」
と、いいました。

二人の話を聞いていた正雄くんがいました。

「やはり、商業や工業がさかんになるにつれて、都市が大きくなっていくだろうよ。東京でも、大阪でも、名古屋でもみんな商工業がさかんだからね。」

そのとき、新聞をおいたにいさんが、

「たいへんいいところに気がついているね。そのとおりなのですよ。ことに大正時代のはじめころから、外国との貿易がさかんになって、国内の商工業はきゆうに発達したのですね。そのため、とくに大きくなった都市もありますよ。なかには、いままでわ

ずかな人口だった町や村が、大きな都市に発展したところさえあるのですからね。」

と、話しました。

これ聞いたよし子さんが、すぐたずねました。

「小さな町が、きゆうに大きな都市になったのですって——。それはどんな都市ですか。」

「京浜地方の川崎市や阪神地方の尼崎市、北九州の八幡市などがそれです。これらは、みんな新しくおこった工業都市ですよ。」

「それらの都市は、大きな工場ができたために、きゆうに開けたわけですね。」

「そうですね。ところが、工業のあまり行なわれない都市は、きゆうには発展しないようですね。京都は、いまは人口百四万くらいですが、百五十年前でも四十万近くあったのですよ。これにくらべると、大阪はそのころ三十万くらいだったのに、いまは百七十万にもふえていますからね。」

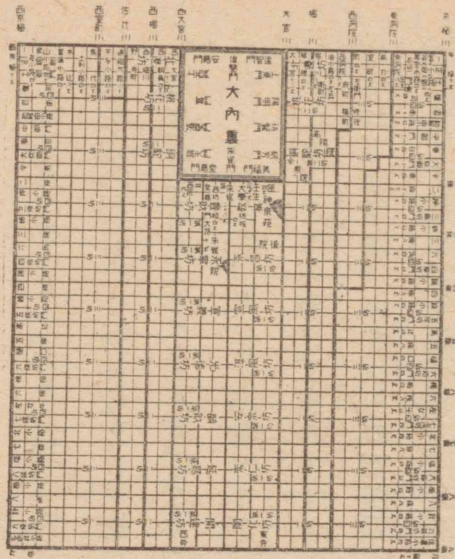
この話を聞くとはる子さんは、花子さんの方を見ながら、

「まあ、百五十年の間に京都は二倍半、大阪は六倍になっているわけですね。」

と、いいました。

すると、花子さんは、

むかしの京都市街図



平安京の古図

「京都は、どうしてむかしからそれほど人口が多かったのですか。」

と、にいさんにたずねました。

「京都は、千年もむかしにつくられた都みやこですからね。そのころの京都は、朱雀すざくの大通りを中央にしてごぼんの目のような街路の通じた美しい町だったのですよ。これはそのころ、たいへん栄えていた大陸の「唐」の都にならってつくったのです。」

にいさんは、こう話してくれました。

「にいさん、むかしの奈良も美しい町だったのでしょ。」

こんどは、はる子さんがいいました。

「そうそう。都であった七十余年の間は、ずいぶんにぎやかで美しい町だったようですね。都がほかの土地にうつってからは、しだいにさびれていったのですよ。でも、京都は、明治のはじめころまで都として続いてきたのですからね。」

にいさんは、つぎつぎと話してくれました。

そのとき、よし子さんが、

「H市は、いつごろ開けたのでしょうかね。町のまん中に城あとが残っていますね。やはり、あの城ができたころからでしょうか。」

と、話しかけました。

すると、正雄くんが、

「これは、いぜんおとうさんから聞いたのですが、H市は三百年くらい前に開けた城下町じょうかだそうですね。城を中心にして武家屋敷ぶけやしきがならば、そのつぎに職人とか商人の家や店がずつと続いて町が開けていたのです。だから、城下町は、武家屋敷、職人町、商

人町などがはっきりしていたわけですね。いまでも、^{とみや}研屋町、^{さいく}細工町とか紙屋町、皮屋町、塩屋町などの名が町名として残っているのも、それぞれの職人や商人が住んでいたことをしめしているわけですね。」

と、話しました。

花子さんは、

「正雄さん、よく知っているのね。では、城ができるまでは、どうだったのでしょうかね。」と、また、いいました。

正雄くんが、しばらく考えていると、にいさんが、

「^ひ日市もずつとむかしは、さびしい村だったのですよ。ところが、川口の^{さんかくす}三角州が城をきずくの、たいへんつごうがよい土地だったので、まず、ここに大きい城をきずいたのです。」

と、話してくれました。

この話を聞いたよし子さんは、

「^ひ日市のような城下町は、ほかの土地にもたくさんあるのでしようね。」

とたずねると、にいさんは、

「そうです。城下町だった都市はたくさんありますよ。東京や名古屋をはじめ、いま各県の中心地になっている^{せんたい}仙台、^{あき}秋田、^{せき}盛岡、^{みづ}水戸、^{しず}静岡、^{かね}金沢、^{わが}和歌山、^{おか}岡山、^{たか}高松、^{とく}徳島、^{まつ}松山、^{たか}高知、^{ふく}福岡、^{さけ}佐賀、^{くま}熊本、^か鹿児島などもそうですし、^{ひろ}弘前、^こ米沢、^こ小田原、^あ浜松、^{おか}岡崎、^つ津山、^う宇和島、^こ小倉なども城下町だったのです。だから、いまの大きな町は、城下町から発達してきたものが多いといってもよいくらいですね。」

そのとき、花子さんがみんなを見ながら、

「そうすると、日本の都市には、城下町から発達したものと、明治時代になって商業や工業が発達するにつれて大きくなった都市とがあることがわかったわけですね。」

と、うれしそうにいいました。

続いて正雄くんが、

「それに、京都のように帝都として一千年ものむかし開かれた都のあることもわすれて

はならないね。」

「いいますと、にいさんが、

「なかなか、はつきりまとめますね。」

と、ほめてくれました。

しばらく考えていたはる子さんが、

「にいさん、大阪も城下町として栄えてきたのですか。」

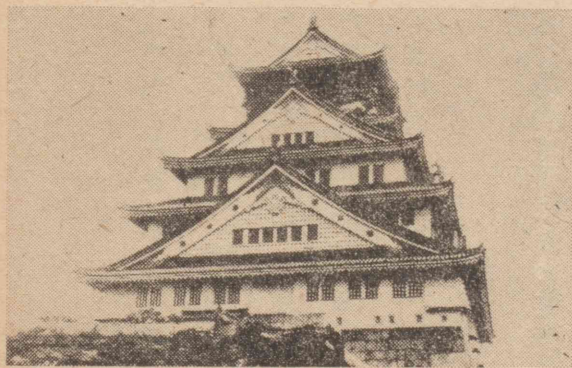
と、たずねました。

「はる子さん、大阪城には、とても大きな石がきがある
のでしよう。」

よし子さんが、はずんだ声でいいますと、

にいさんが、

「そうそう、大阪には大阪城がありますね。だから、城
下町とも思われますが、あれは、豊臣秀吉のころのこ



大阪城

とて、江戸時代には大名はいなかったのです。でも、大阪はずいぶんはやくから開け
た町ですよ。それは、奈良や京都が帝都であったころ大陸にわたる船が出たりはいっ
たりする港だったからです。そのうち、時代が進んで江戸時代になると、国内のい

むかしの長崎港

ききがさかんになり、よい港をもつ大阪が西の商業の
中心地になったので、たいへん栄えたのです。つまり
大阪は港として大きくなった町ですね。こんなふう
に開けた町もほかにたくさんありますよ。」

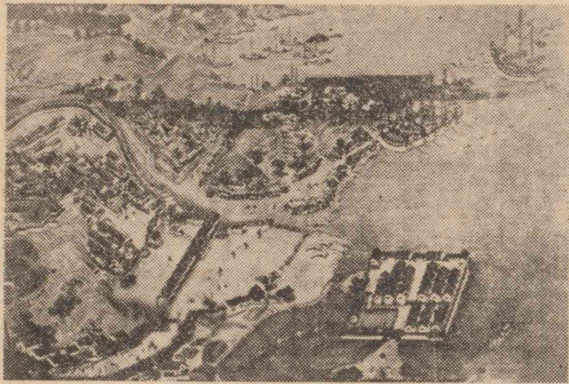
と、話してくれました。

よし子さんが、

「どんな町ですか。」

と、たずねますと、にいさんが、

「九州の博多や長崎、三重県の津など、それから日本海
に面した新潟や酒田などもありますね。それに大津は



琵琶湖の南岸にあつて、やはりもとは、港として開けたところですよ。

と、いいました。

すると、花子さんが、

「横浜や神戸も、港として栄えた都市でしょう。」

と、たずねました。

にいはさんは、大きくうなずきながら、

「いいところに気がつきましたね。横浜や神戸は、

古くからある港ではありませんが、国内の商業

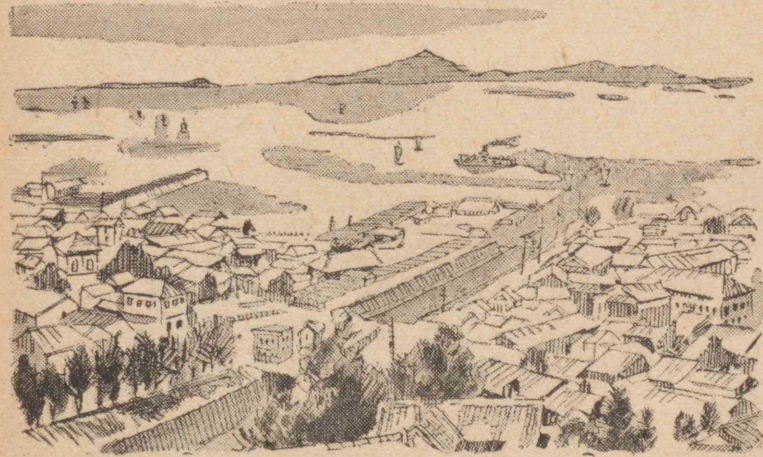
や工業がさかんになつて外国との貿易を始めて

からきゆうに発達した貿易港ですよ。貿易港だ

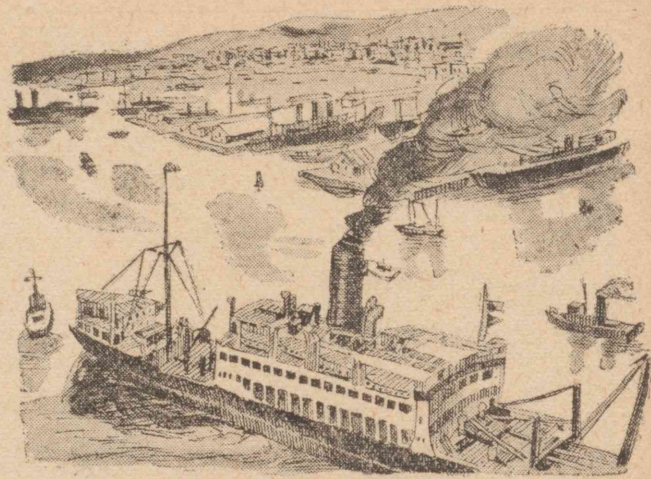
けに、ほかの都市とはまたかわつた情景を見せ

ていますね。」

といいますと、



大津



神戸港

よし子さんが、

「門司や下関も港町として大きい方でしょう。」

と、たずねました。

にいはさんは、

「そうです。門司と下関との間の海峡は交通上た

いへん重要なところだったので交通がさかんに

なるにつれて門司も下関も、たいへん栄えまし

たが、とくに下関は漁業の根拠地としても有名

です。函館や青森もまた、交通上にも漁業上にも

たいせつな港ですね。こんなふうに港が栄えた

り、小さい町がきゆうに大きい都市になるのには、それぞれ大きい理由があるのですよ。

と、くわしく説明してくれました。

そのとき花子さんが、

「本で読んだのですが、宿場町というのもあるでしょう。と、たずねました。」

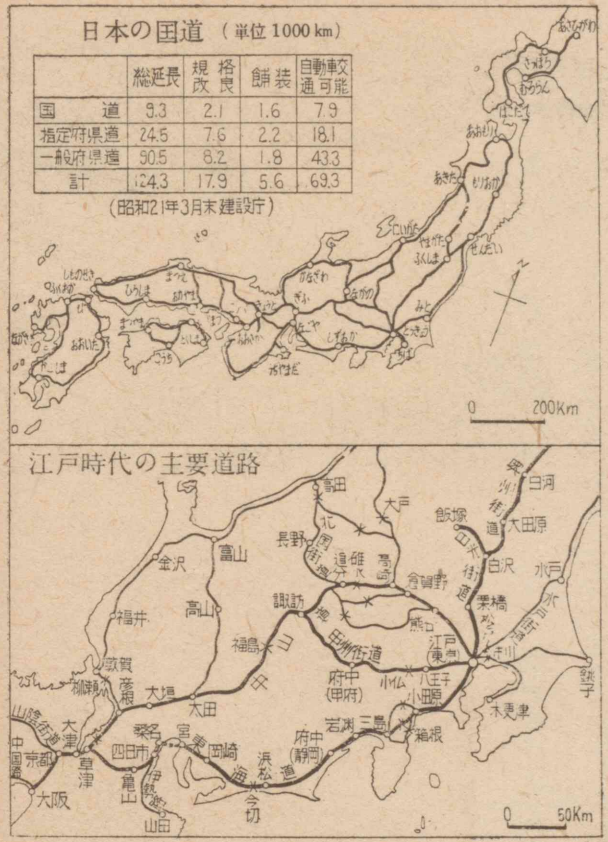
「そうそう。よく調べていますね。有名な東海道五十三次ごじゅうさんじの宿場の小田原おだわらや三島みしま・桑名くわな

四日市・草津などは、この街道すじに開けた宿場町ですよ。」

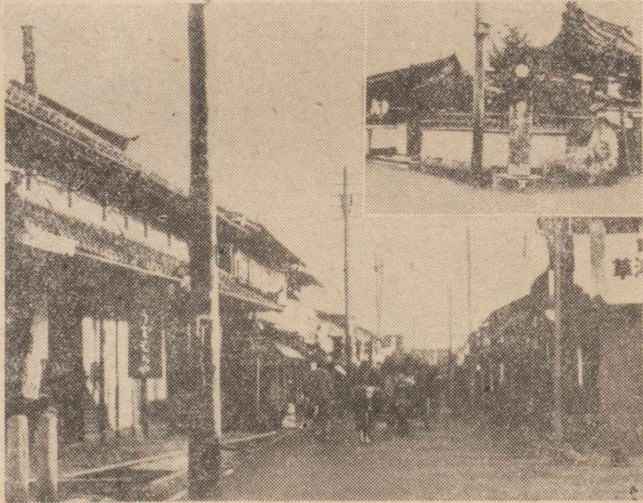
「東海道五十三次ってなんのことですか。」

「東海道五十三次ですか。」

これはね、江戸と京都の間百三十里をむすぶ東海道の宿場のことなのです。この東海道は、ずつ



とむかしから開けてはいたのですが、江戸時代に改修して、三里か五里ごとに宿場をつくり、旅人の便利をはかったのです。そのような宿場が、この街道に五十三あったので、東海道五十三次といったのです。このころはもちろん、汽車はないのでみんなこの街道を歩いたわけですよ。だから、宿場はだんだん発達して町をつくることになったわけ。このほかにも、江戸を中心にしていろいろの街道を通じていましたから、宿場町はあちらこちらにたくさんあったわけ。でも、鉄道が通じてからは、旅行者がずどおりするため、たいへんさびれたところも多いようですね。」



宿場として栄えた草津町の現在

ここで、にいさんはちよつと話をとめて、一さつの本をもつてきました。「ほら、ごらん。この町も東海道すじの宿場町だったのですよ。」



善光寺門前通

と、いいながら一枚の写真をゆびさしました。見ると、街道の分かれるところに、むかしを思わせる道しるべがあり、街道にそつてながながと家々が建ちならんでいるようすが想像されました。みんなは、宿場町は、旅人を相手にして開けた町なので、街道にそつて細長く開けるのだらうと話しました。

写真を見たあと、正雄くんが、

「もつとほかのわけで、開けた町はないのでしょうか。」

と、たずねました。

「そうですね。まだいろいろあるのですがね。」

と、いつてにいさんは、神社や寺院の前に開けた門前町もんぜんのことや温泉地に開けた温泉町、鉾山こしやまのために開けた鉾山町などについてもいろいろ話してくれました。

みんなは、こんな話を聞いたり、話しあったりしているうちに、町のおこりには、いろいろあることがわかつて、たいへんおもしろいと思いました。

こうして花子さんたちは、日本の都市の分布や町のおこりについて調べていくにしたがつて、これらの都市と村との関係がはつきりわかってきました。花子さんの村でも、近くの都市やずつと遠方の都市とたいへん深い関係がありました。このような村と村、村と都市、都市と都市の関係は、全国のどこでもいえることです。つまり、村の人と都市の人とが、それぞれの仕事によって深く結ばれているばかりでなく、明かるい平和な社会を建設するため、たがいに協力しながら生活を営んでいるのが、わたくしたちの社会なのです。

学習の手びき

- (一) 東京や大阪をはじめとして大きな都市は、ここ数十年の間に発達してきたのですが、これらの都市の人口や建物は、時代がすすむにつれてどんなに変わってきたかについて調べましよう。とくに、わたくしたちの都市や近くの都市についてくわしく調べてごらんなさう。
- (二) 都市は、人口が多いだけに保健や犯罪などいろいろな社会問題がともないます。こんな点から都市と農村とをくらべてみましょう。とくに都市と村との政治について、いろいろ調べて話しあつてごらんなさう。
- (三) わが国の町のおこりには、いろいろなわけがあるようです。これらの町は、どんなにしておこってきたかについて、できるだけくわしく調べてごらんなさう。
- (四) 江戸時代には、たくさんの城下町が栄えていましたね。これらの城下町は、どうしておこつたのでしょうか。こうした歴史についても調べてごらんなさう。
- (五) 江戸時代には、街道の開発はたいへん進んだようです。おもな街道には、どんなものがあつたでしょうか。また、それらの街道のいきさつはどんなだったのでしょうか。また、これらの街道といまの鉄道線路についても調べてごらんなさう。

- 一、この本の中ででていることがらや地名などから、たいせつと思われるものを集めて、このさくいんをつくりました。
- 二、さくいんにでているページは、この本の中でおもにでているところでは、
- 三、太字にしてあるものは、とくにたいせつなものです。

さくいん

(ア) アイヌ人……………	五一	遠洋漁業……………	七六
青物市場……………	九四	(オ) 大麦……………	四八
秋作の野菜……………	九一	沖合漁業……………	七六
(イ) 稲かり……………	一九	表日本……………	四五
稲の直播法……………	五五	音楽会……………	一〇三
稲の苗代法……………	一一	温泉町……………	一三五
稲の分けつ……………	一三	(カ) 海水だめ……………	八一
(ウ) ウイリッカ……………	八七	開拓村……………	五〇
埋立地……………	五八	開拓民……………	五二
裏日本……………	四六	かいだん状の水田……………	二四
(エ) 沿岸漁業……………	七六	街道……………	一三四
塩業組合……………	八〇	かいの養殖……………	七九
遠心分離機……………	八六	かきの養殖……………	七九
塩田……………	八〇	鹿児島本線……………	一一九
えん麦……………	四八	果樹園……………	三二
		家畜の飼料……………	四八

市内電車	一一二
地引網	六三
商業都市	一一二
出張員	一〇〇
消防署	一一三
商店街	一一三
小都市	一一八
商人町	一二五
商品の仕入れ	九九
職業安定所	一一六
職業別人口グラフ	七
職人町	一二五
城下町	一二五
社会問題	一一六
宿場町	一三二
人口の集中	一一五
しんじゆの養殖	七九
新田開発の村	五七

(キ) 製塩法	八七
西南日本	四八
西洋種の作物	五六
瀬戸内海	六七
専売公社	八六
(ク) 大 学	一一四
たい肥	一〇
大名	一二九
大都市	一一八
大農法	五六
田うえのころ	一〇
高 潮	五八
脱穀機	二〇
田の草とり	一三
ため池	二四
暖 流	七六

(ケ) 警察署	一一六
兼業農家	七
原始林	五一
(コ) 公 園	一一六
講演会	一〇三
郊外電車	五
工業都市	一二三
工場地帯	一一五
鉾山町	一三五
小売店	九八
米の移出県	二七
米の移入県	二六
米の供出	四二
米の生産と消費	二四
(チ) 千島海流(親潮)	七七
茶の産地	三七
住宅街	一一四
中都市	一一八
治療所	一一六
(ツ) 対馬海流	七七
津 波	五八
(テ) デパート	一〇七
天日製塩法	八七
(ト) 唐	一一四
東海道五十三次	一三二
東海道本線	一一九
動物園	一一六
道頓堀	一一三
東北日本	四八

かつお船	六七
樺太海流	七八
岩 塩	八七
干拓地	五八
干 潮	八二
寒 流	七八
(キ) ぎし針	六九
紀州みかん	三六
京極通り	一一三
凶 作	五三
漁業組合	六三
漁船の根拠地	七八
漁船の発達	六八
協同組合	八
近海漁業	七六
銀座通り	一〇六
近代都市	一一六

きんちゃく網	七三
金 肥	一〇
(ケ) 警察署	一一六
兼業農家	七
原始林	五一
(コ) 公 園	一一六
講演会	一〇三
郊外電車	五
工業都市	一二三
工場地帯	一一五
鉾山町	一三五
小売店	九八
米の移出県	二七
米の移入県	二六
米の供出	四二
米の生産と消費	二四

米の分布	一一
娯楽施設	一一六
(サ) 魚の加工	七九
魚の水あげ	六一
山陰本線	一一九
殺虫剤	三四
三州州	一二六
さんしゃ	八三
山陽本線	一一九
(シ) 塩のかま屋	八五
塩の産地	八七
塩の配給	八六
塩の用途	八八
時間の利用	一七
市 制	一一八
湿 田	四六

道路の改修	一四	(ノ) 農事試験場	五四	平和都市	一一七
都市の分布	一一八	農 村	七	(ホ) 貿易港	一三〇
図書館	一一六	農はん休み	一二	放 牧	五七
都心部	一一二	のりの養殖	七九	牧 場	五六
トロール船	七一	(ハ) パイプオルガン	一〇七	捕鯨業	七六
問屋	九八	博覧会	一〇三	北陸本線	一一九
(ナ) 仲継店	九八	はだか麦	四八	北海道の開拓	五一
苗代	一二	発動機	二一	北海道の農村	五〇
(三) 西日本	三六	発動機船	六九	古い習慣	一八
にしん漁	七八	はまみぞ	八三	ぼんおどり	一四
二百十日	一九	春作の野菜	九一	(マ) 町への動脈	九四
日本海流(親潮)	七六	(フ) 副業	九	町のおこり	一一一
日本の漁場	七八	部 落	六	満 潮	八二
(ヌ) 沼 井	八五	文化都市	一一七	(ミ) みかんの栽培	三三二
		(ヘ) 平野と盆地	一一二	みかんの三大生産地	三八

道しるべ	一三四	(ヨ) 用水路	一四
港 町	一二九	(リ) りんごの産地	三九
都	一二四	りんごの歴史	四〇
(ム) 麦の産地	四四	(レ) 冷 害	五三
麦まき	四一	冷蔵庫	七二
村と町との関係	一〇三	冷凍室	七〇
村の行事	一四	(ワ) わせ温州	三三
(メ) 迷 信	一六		
(モ) 毛細管現象	八三		
門前町	一三五		
(ヤ) 野菜づくり	九二		
(ユ) 遊戯場	一一七		
雪の分布	四六		

先生がたへ

第五学年用として、「村の生活町の生活」「工業と生活」の二冊を編集しました。そのうち、本書「村の生活町の生活」は、つぎの諸点を考慮して執筆してあります。

一、第五学年の児童は、その学習経験の範囲を日本にひろげて、より広い地域についての理解を得ようとする欲求と興味とを深くもっていると思われれます。この欲求と興味とを満たして、生活の拡充を図ることは、また社会的要求でもあります。

かかる見地から、日本の村と町とに取材し、その依存関係を考察させることによって、児童の欲求と関心を満たすことにつとめました。

二、しかし、その範囲は、まず都市近郊の農村に取材して一年の生活の展開をながめつつ、これと関係の深い漁村や山村の生活をとりいれ、これらと都市との関係を深く理解させることを考えました。

また、それとともに都市の生活をも取材して、近代都市のようすを明らかにすることも企図しました。

三、本書は、また中心人物の花子、ならびにその友だちを活動させ、学習の具体的展開をこころ

みることによって民主的な生活の仕方を会得させることにもつとめてあります。

四、文章は、平易をむねとし、新かなづかいと教育漢字とを用いました。しかし、特別の用語は当用漢字を用いてふりがなをつけることにしました。

五、児童の興味をますとともに、その理解を深めるため、図版などを多くとりいれました。もちろん、これでじゅうぶんだとはいえません。とくに移動的な統計や分布図は、そのとりあつかいに留意していただきたいと思えます。

Copyright 1950, by
The Gakkō Tosho Kenkyūkai

All rights, reserved

The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小社 502

社 会 科 第五学年用

村の生活 町の生活

Approved by Ministry of Education

(Date 1950)

編 者

廣島市東千田町
廣島高等師範学校附属小学校内

岡 部 充

表紙 高橋正人

田 北 浦 久 雄
中 正 文 範
さしえ 木川秀雄

昭和二十五年

月 日 印刷
月 日 発行

定価

円

著 者

廣島市東千田町 廣島高等師範学校附属小学校内
財団法人 学校図書研究会

発 行 者

東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社

印 刷 者

東京都港区芝三田豊岡町八番地
印刷株式会社

発 行 所

東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社

本書の指導書・ワークブック・註釈書並びに
これに類する一切のもの無断発行を禁ずる

広島大学図書

広島大学図書

0130449979



文庫

50

979